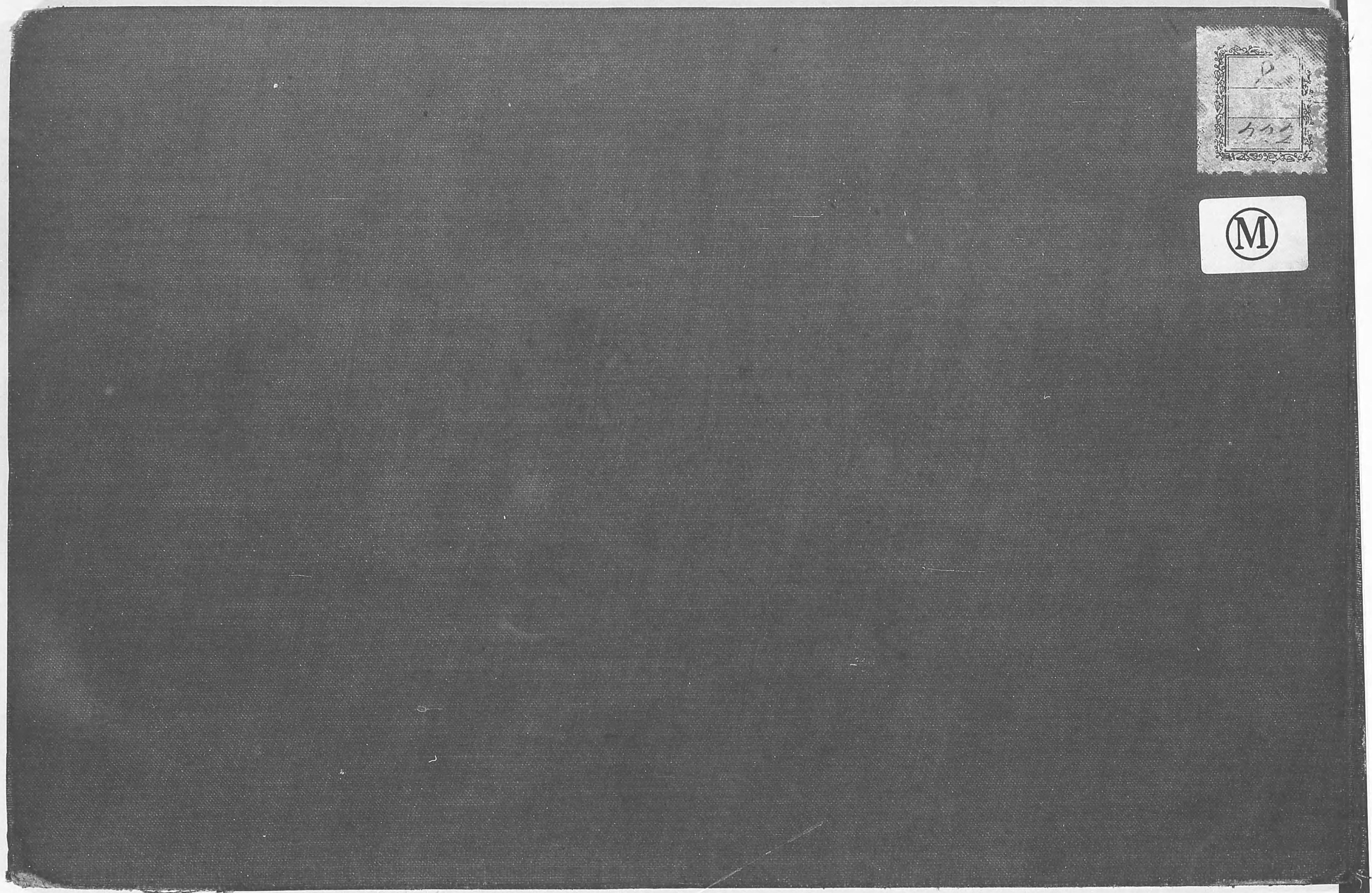


始



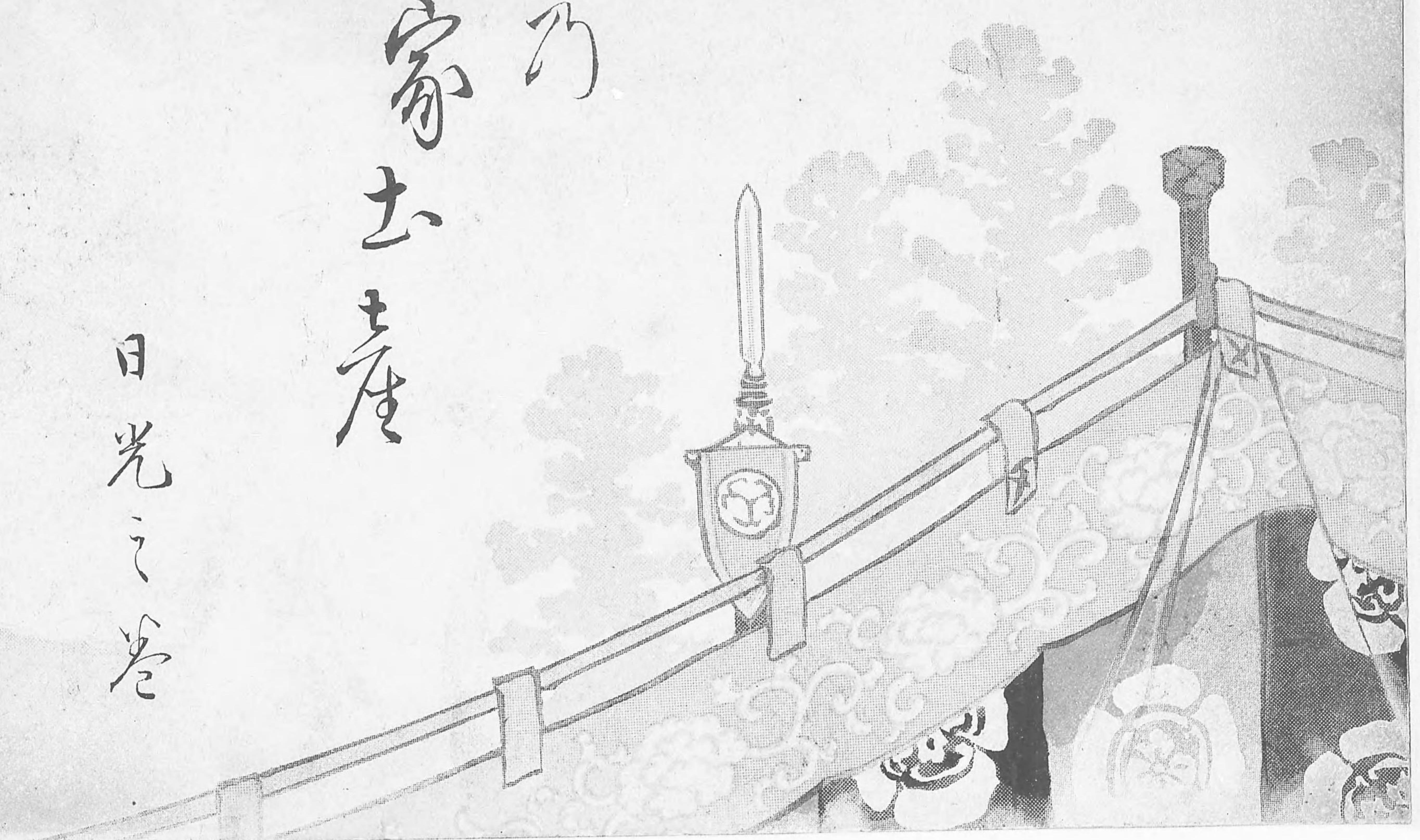


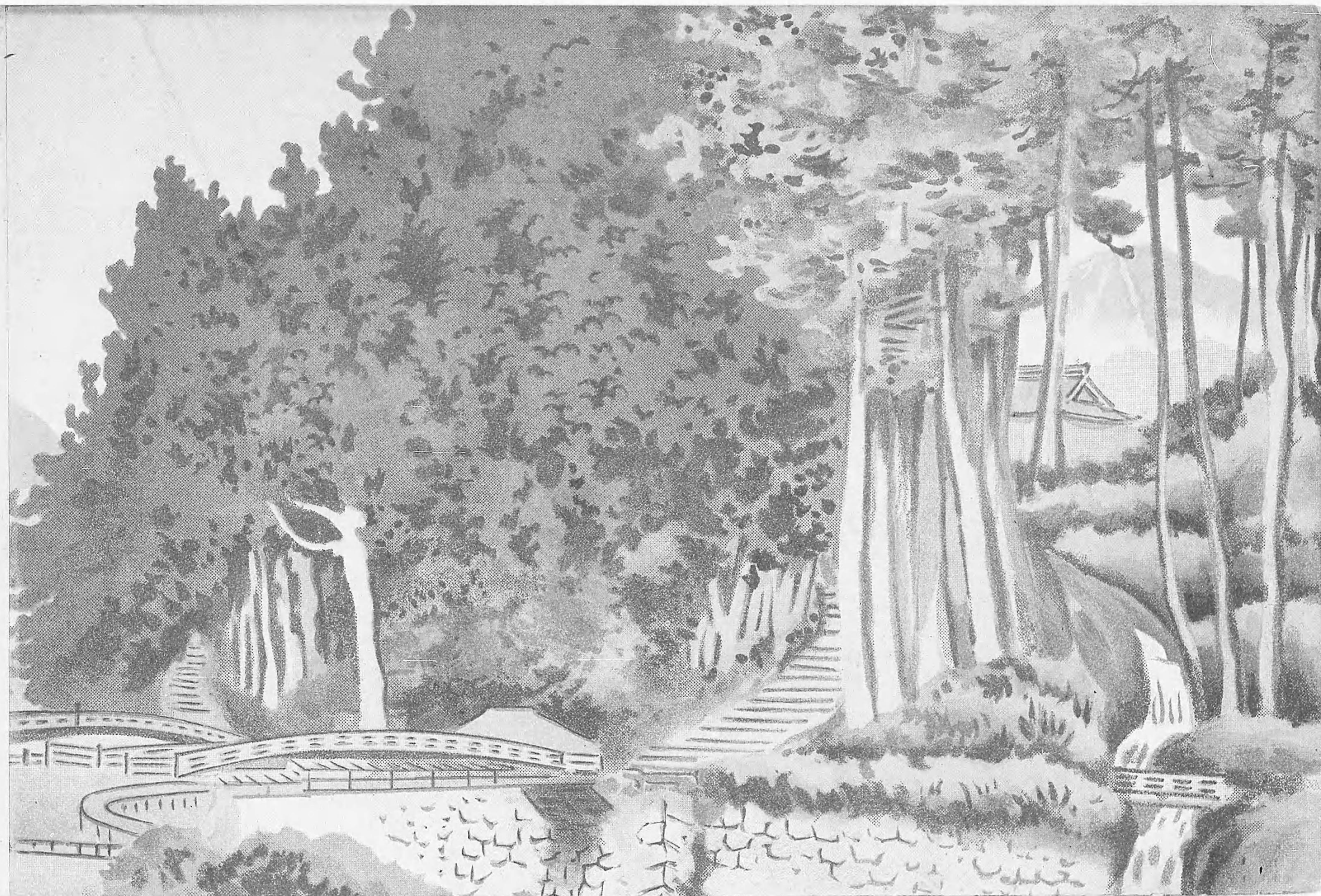
8
222

旅乃

家土產

日光之卷







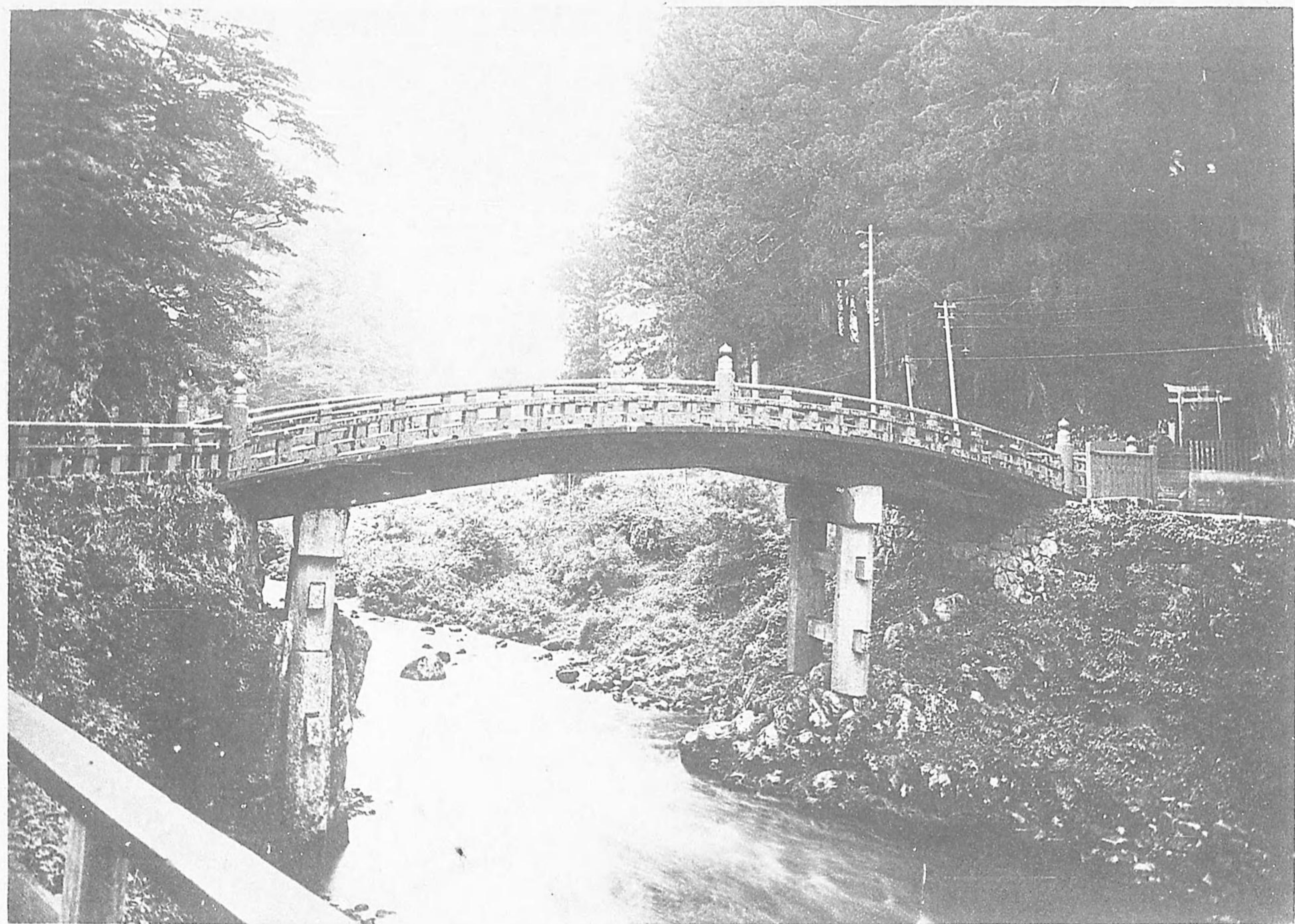
神橋

町を過くれは一溪の横まに道を断ち山を抱いて奔
來するあり、朱欄橋を架す、其の橋下の柱を石に
し欄頭の葱寶珠を金にす、碧水と映帯して綺麗繪
くか如し神護景雲の年勝道上人、初めて此山に入
る此に至つて渉るべからず、山の靈青朱の二蛇を
縦つて躍つて橋を作らしむ、蛇背潤滑にして渡る
べからず、傍に白茅あるを取て之れを布き僅かに
渡るこ、荒唐の語と雖も亦た是佳詩、この橋人の
渡るを許さず、橋の右十數歩にして更に一橋を架
す.....麗水

むは玉の黒髪山のやま管に

いさめ降りしきますくそ思ふ
人丸





橋

田舎の川に架かる石橋の風景



三佛堂

輪王寺内にあり千手観音馬頭観音

阿彌陀如來の三佛を祀れる堂なり

見物の客は薄暗き内陣に導かれ

てお蠟を勧めらるゝなり……





三
世
堂

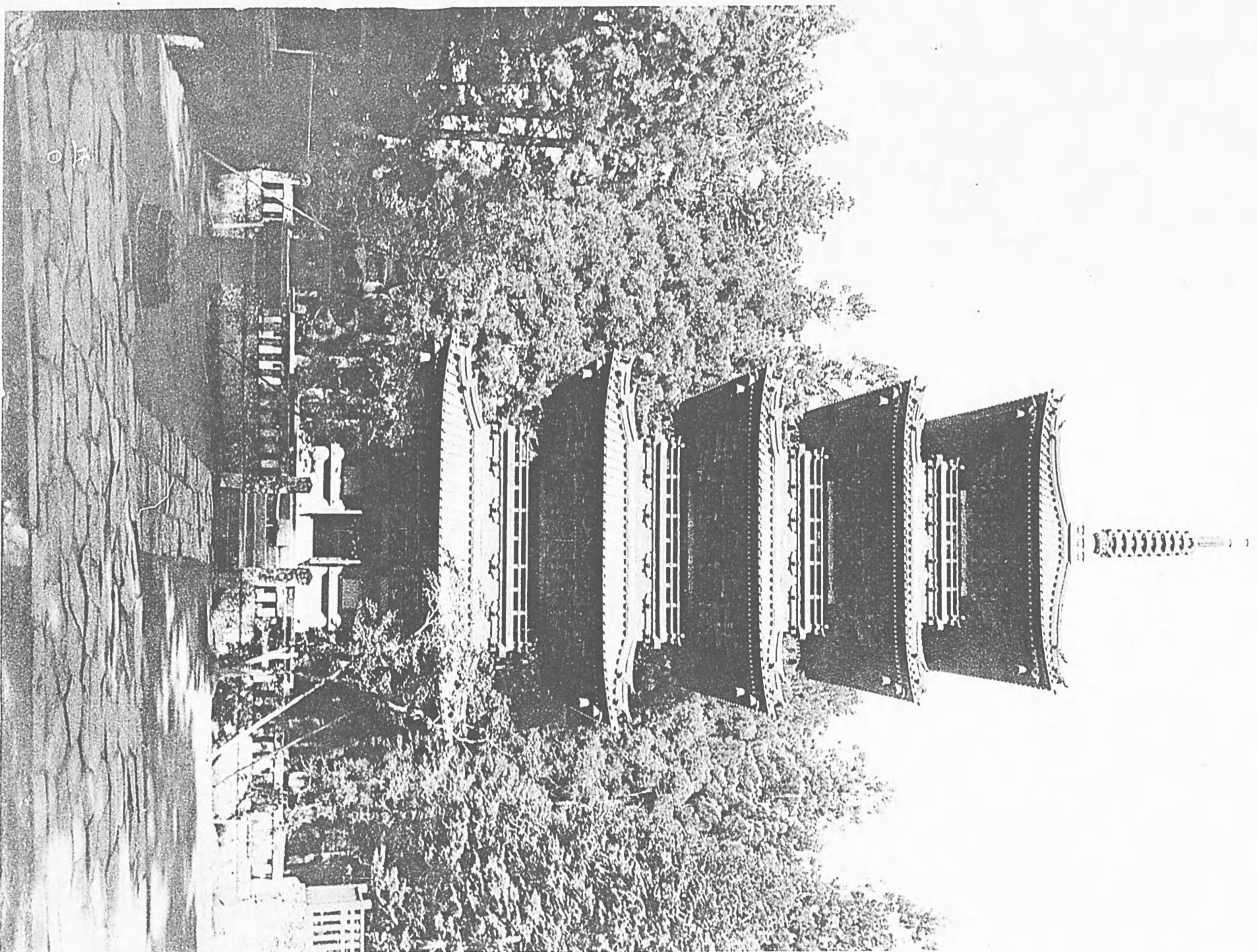
會王堂内之石手園音調師題音

五重塔

東照廟表門前にあり若州小濱城主酒

井氏寄進と案内者は語る是を支ふる

柱一本にして彩るに丹碧を以てす…



表門内全景



これ廐の前より見たる此邊の全景なり建
物一つく見るよりはかく打眺めたる方
一層結構なり.....





表門内全景

御 厩

縦三間横五間餘總白木造にして承塵の下に松竹
牡丹を刻み表には葵の紋を附す金物は總て鍍金
せり廟中白木造はこれ唯一箇……



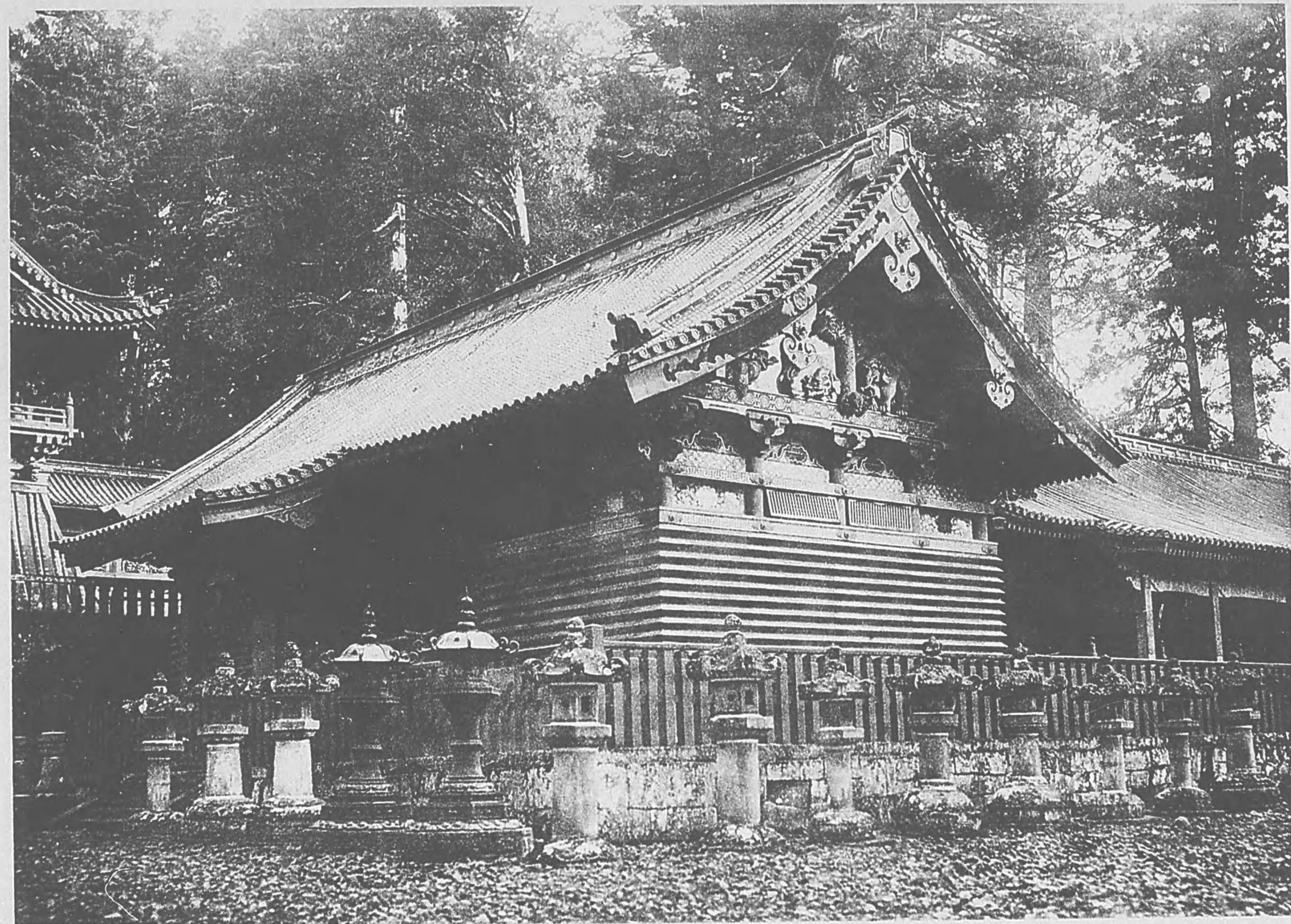


神庫



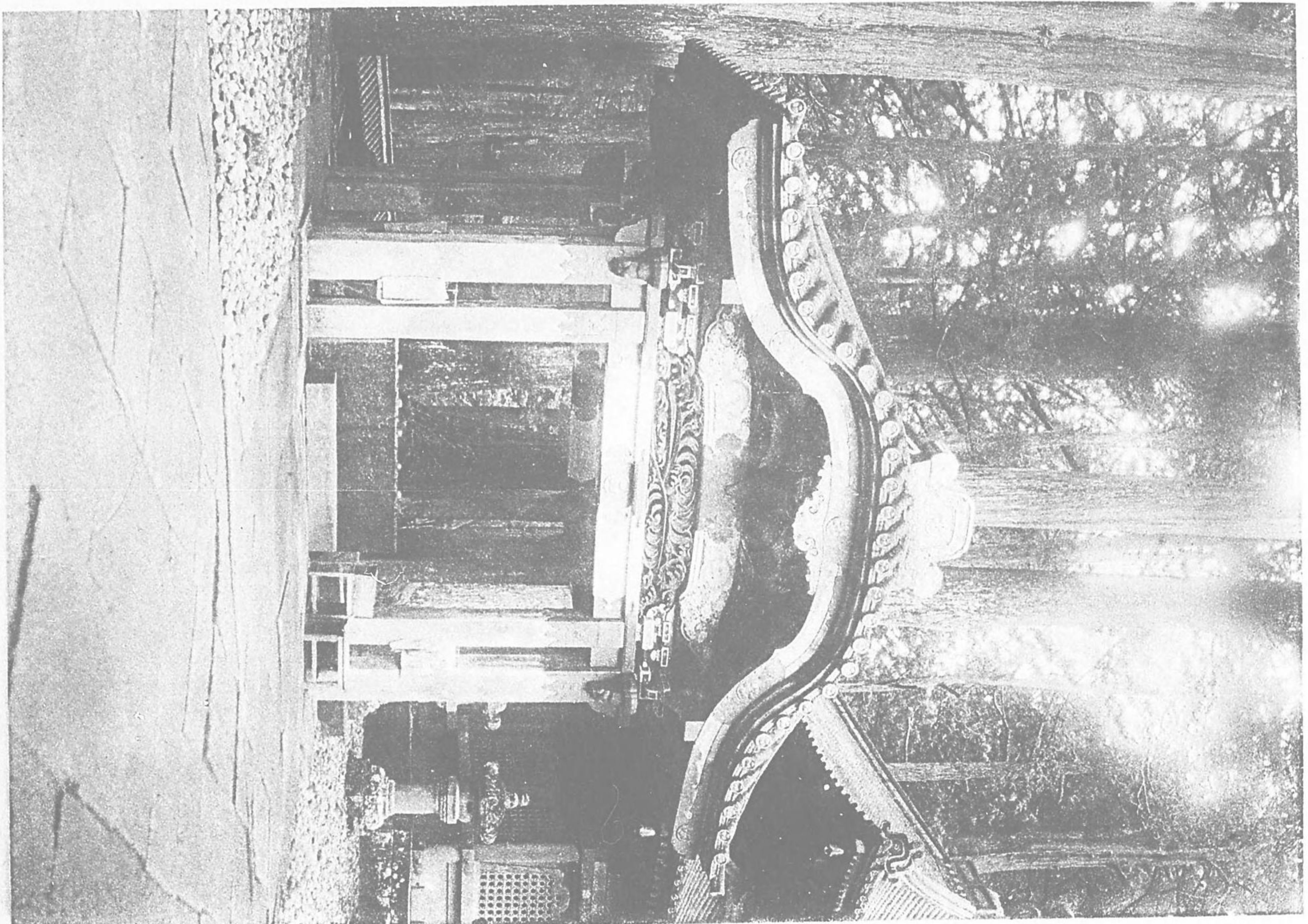
厩の向に對立す三棟總朱塗にして孰れ
も方木をもて積み上げたれば恰かも外
側蛇腹の如し破風下に灰白二象を刻す





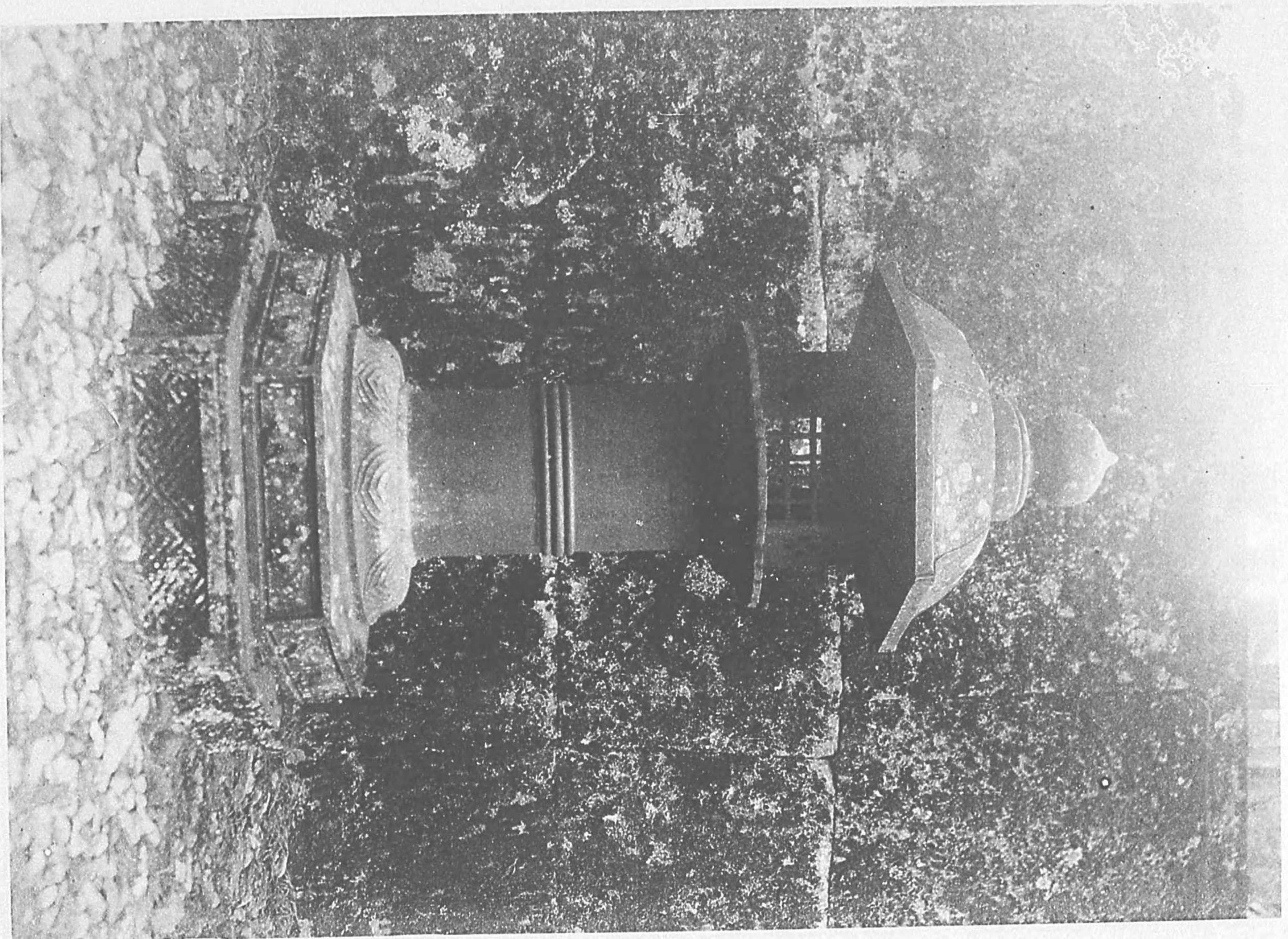
水盤堂

御影の一本石長八尺五寸幅四尺
高三尺にして柱は一隅三本都合
十二本桁際黄銅を以て包み破風
下に飛龍を刻すこれ肥前佐賀城
主鍋島信濃守の寄進……………



南蠻鐵燈籠

此邊諸侯獻上の燈籠總て百十八基其中最も得難きは石段の右にある伊達政宗獻上の南蠻鐵の燈籠二基とす案内者の説を信させは實に騷動物なり曰く政宗六十萬石の封三年分を費やして得たりと感心に小さくなき御話ならずや……………



東照廟表門



参拜の客此處にて履物を脱し更らに廟

内一定の履物たる所謂日光下駄を借り

て門に入る但靴は差支なし……………





蓮
燈
籠

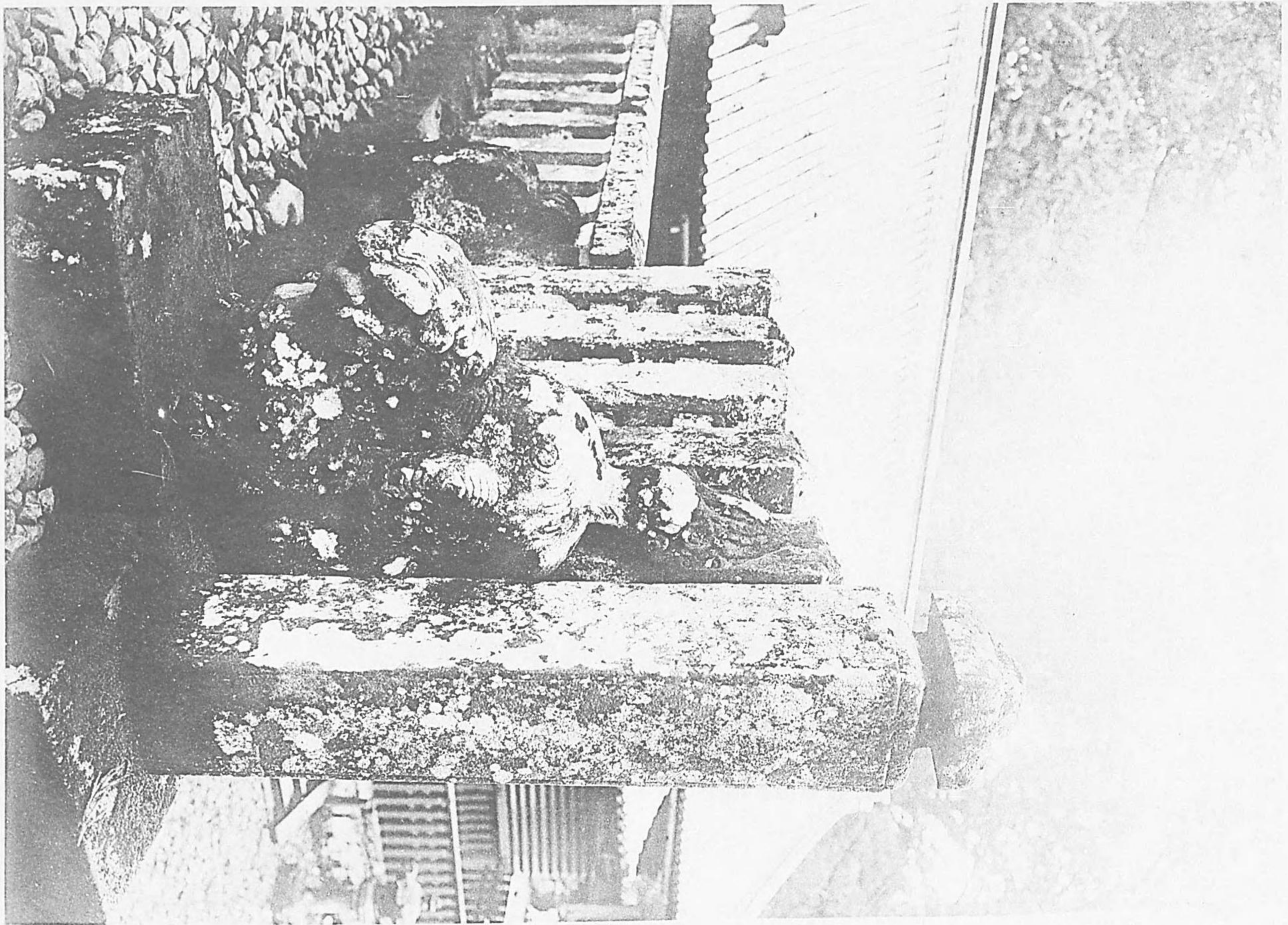
琉球王の獻する所さいふ





飛越獅子

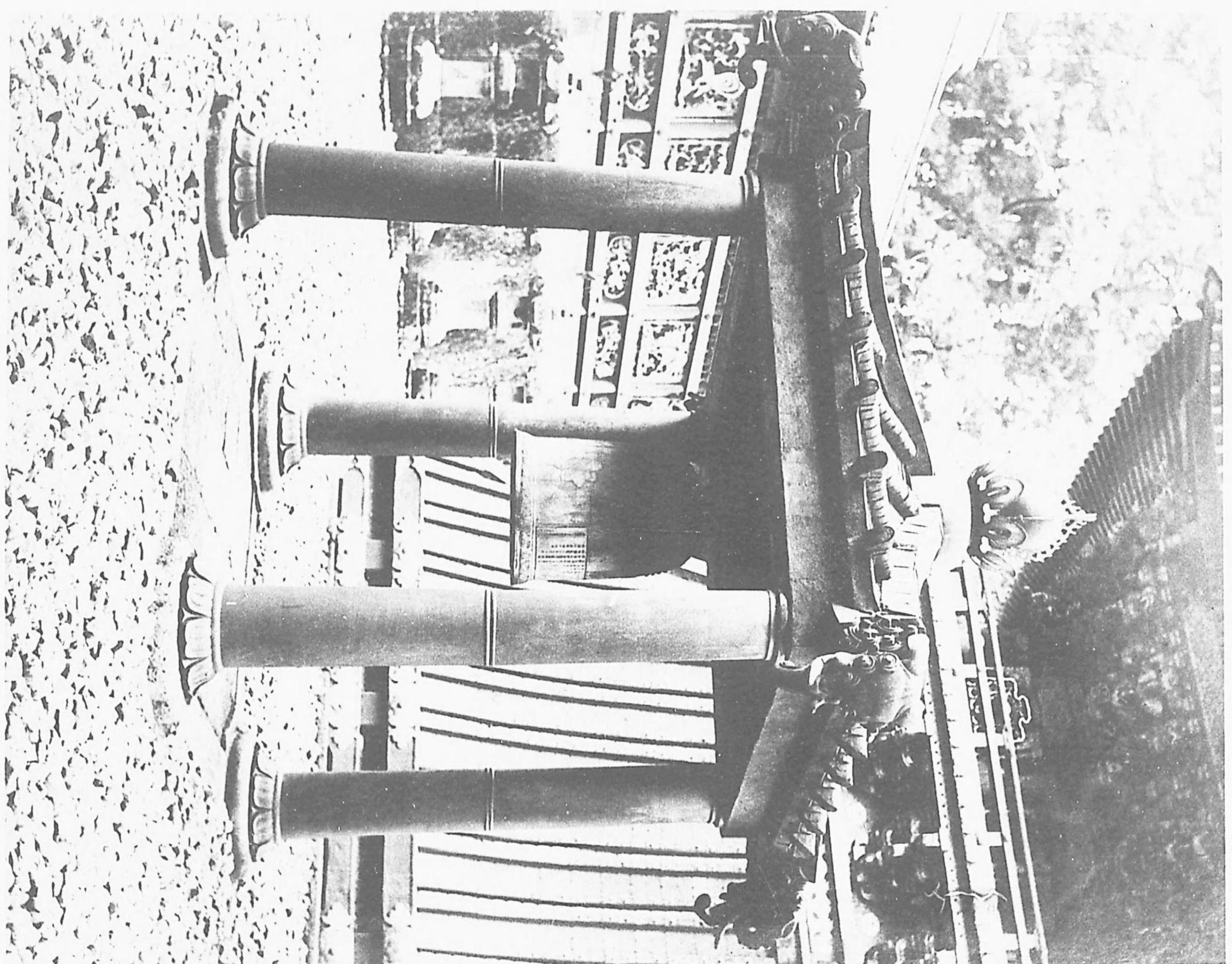
石段を登り盡せば左右玉垣の兩側に
柱と共彫の獅子あり其狀恰かも飛越
ゑたる態あり秋元但州の寄進なり傳
へいふ本廟經營全く成るや將軍親し
く巡見せしも構造意に満たす心大に
悦ばす漸く歸路此獅子を見るに及び
感賞措かず終に滞りなく御巡見相濟
むを得たりと……………



虫喰鐘

朝鮮國王獻する所

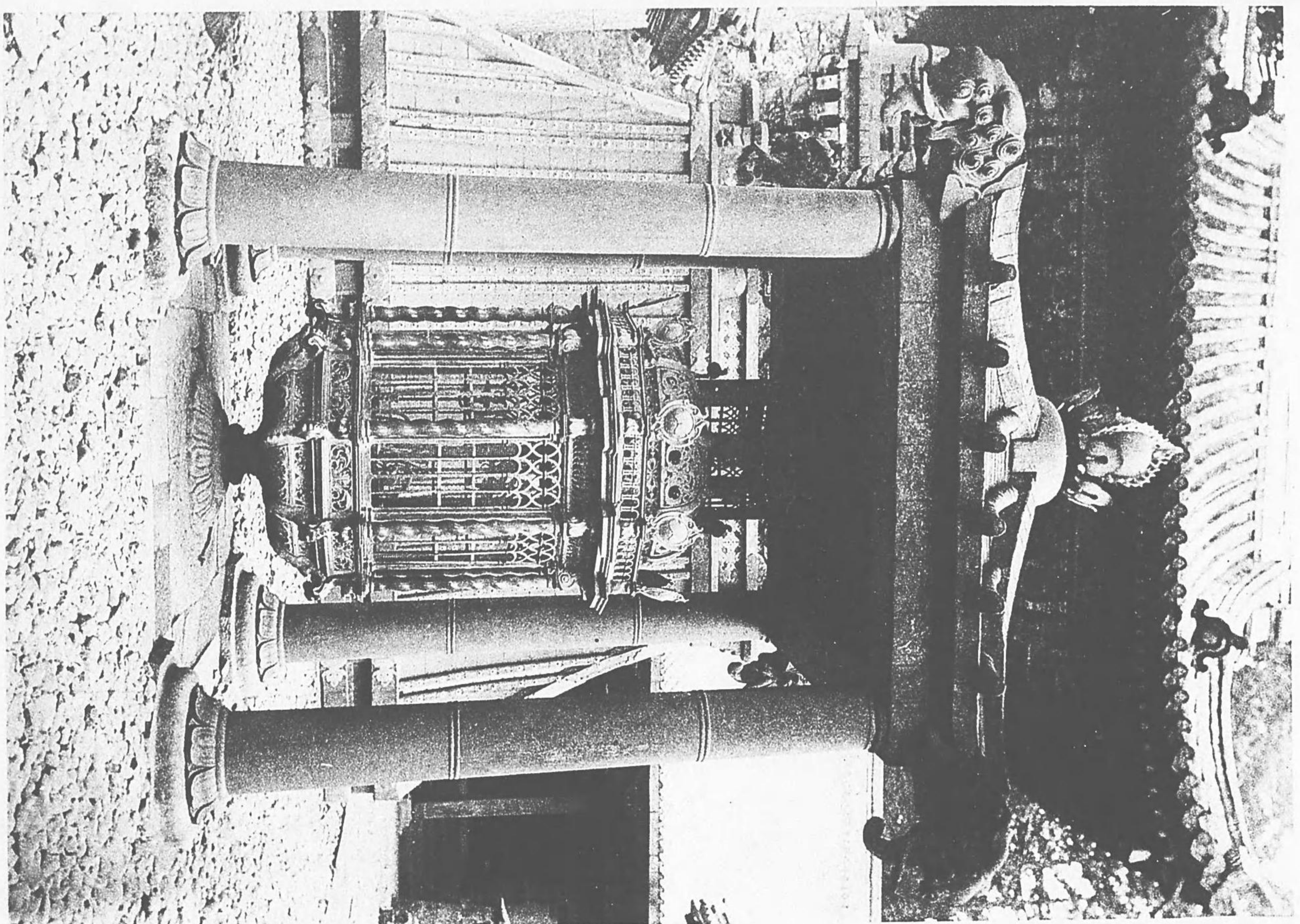




廻
燈
籠

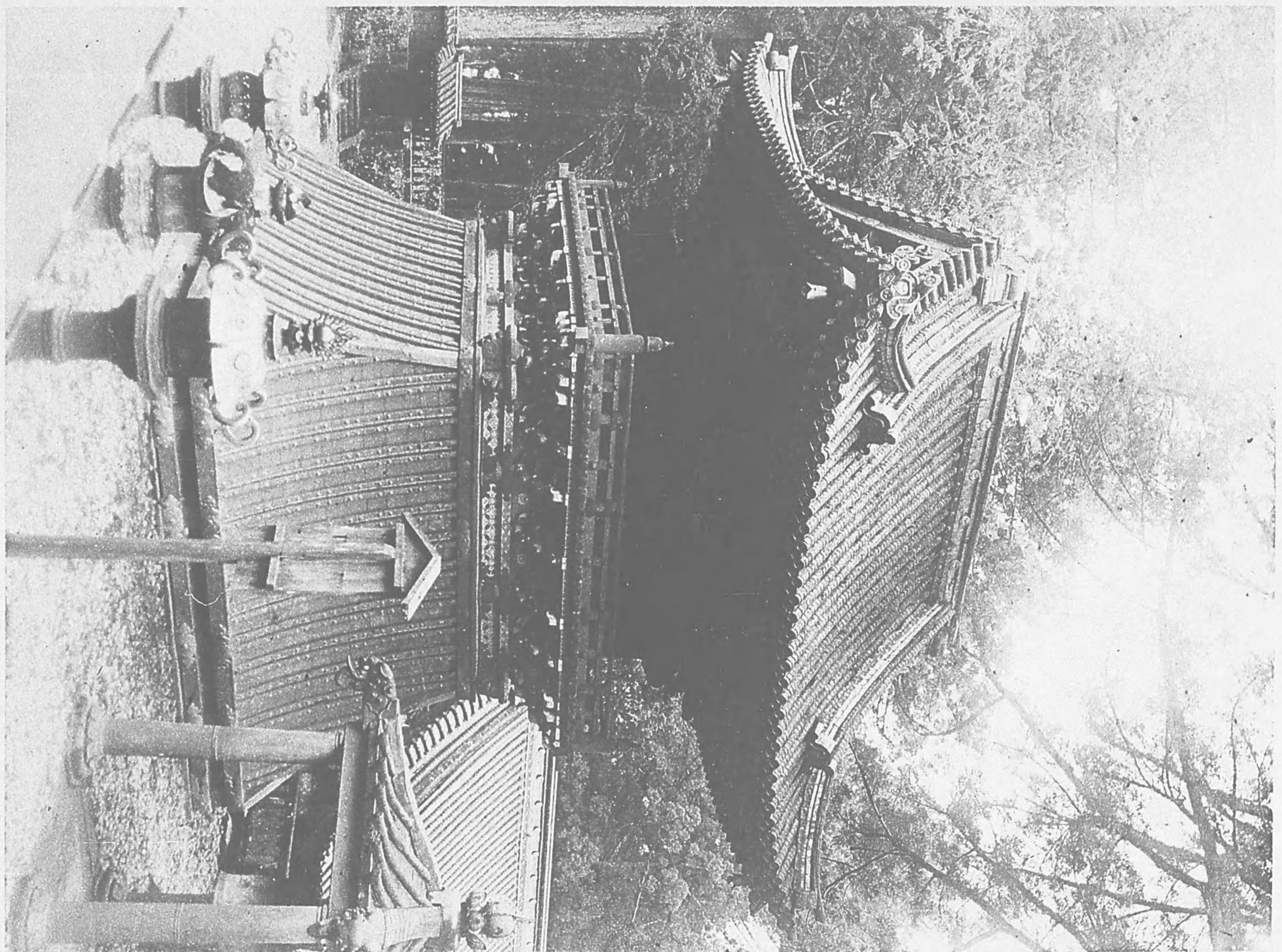
和蘭國王の寄贈にかゝるといふ





鐘
樓

これその右にあるもの左に鼓樓對立
せり共に所謂東照神君家康か軍に用
ひたる鐘鼓を納む……………



陽明門

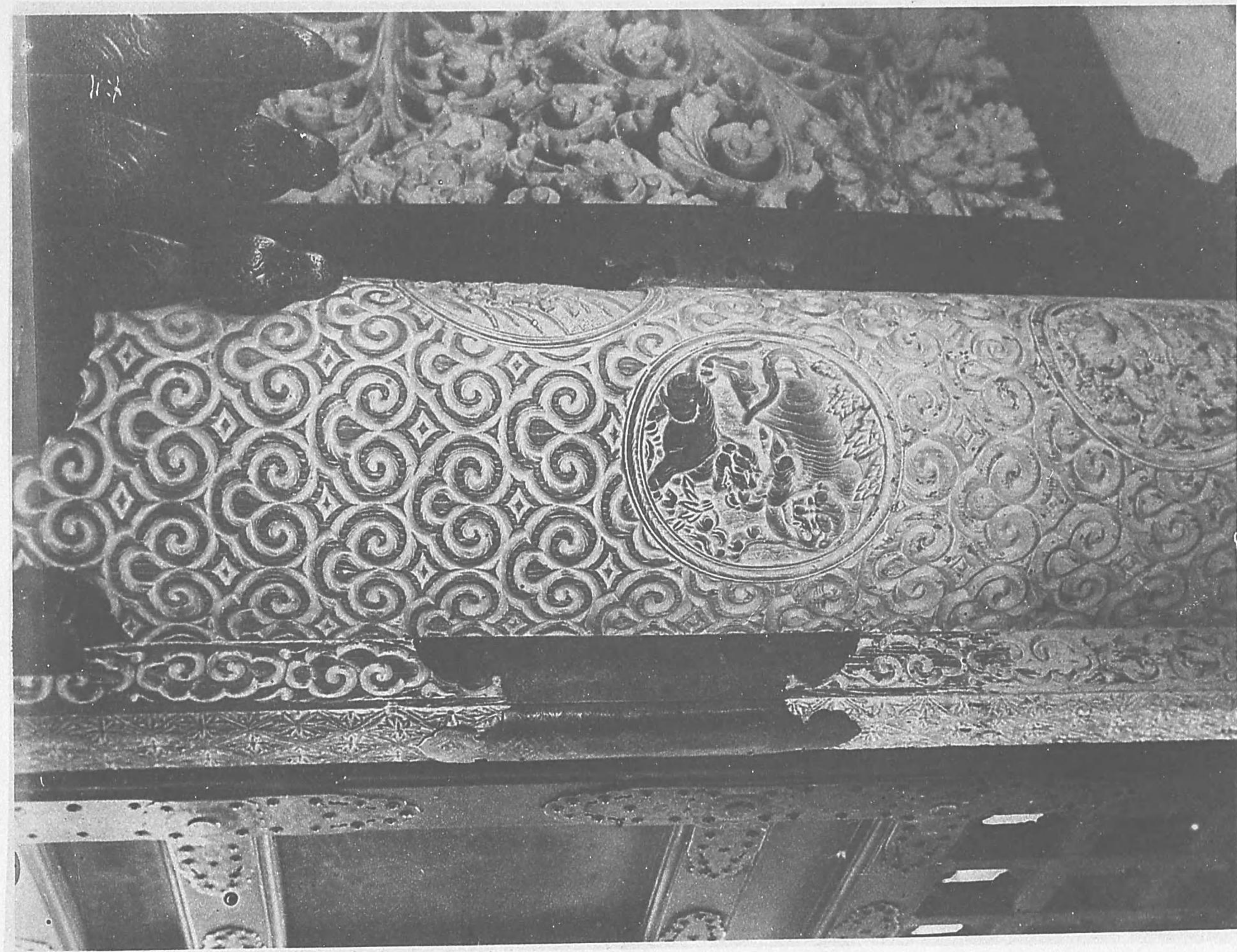
門は廣き四間奥行二間俗に日暮しの門
といふこれ終日望むも猶盡さすこの意
なり宜なり楣欄梁柱皆燦爛眩せんこす
表に極彩色の隨身あり天井には狩野守
信の升龍降龍俗に八方睨と稱ふるもの
あり柱十二本孰れも槐の丸柱にして中
柱に木目の虎を刻し裏手の一本は逆柱
にして俗に魔除柱と稱ふ此に來るの客
皆嗒然として歎美の辭を忘る



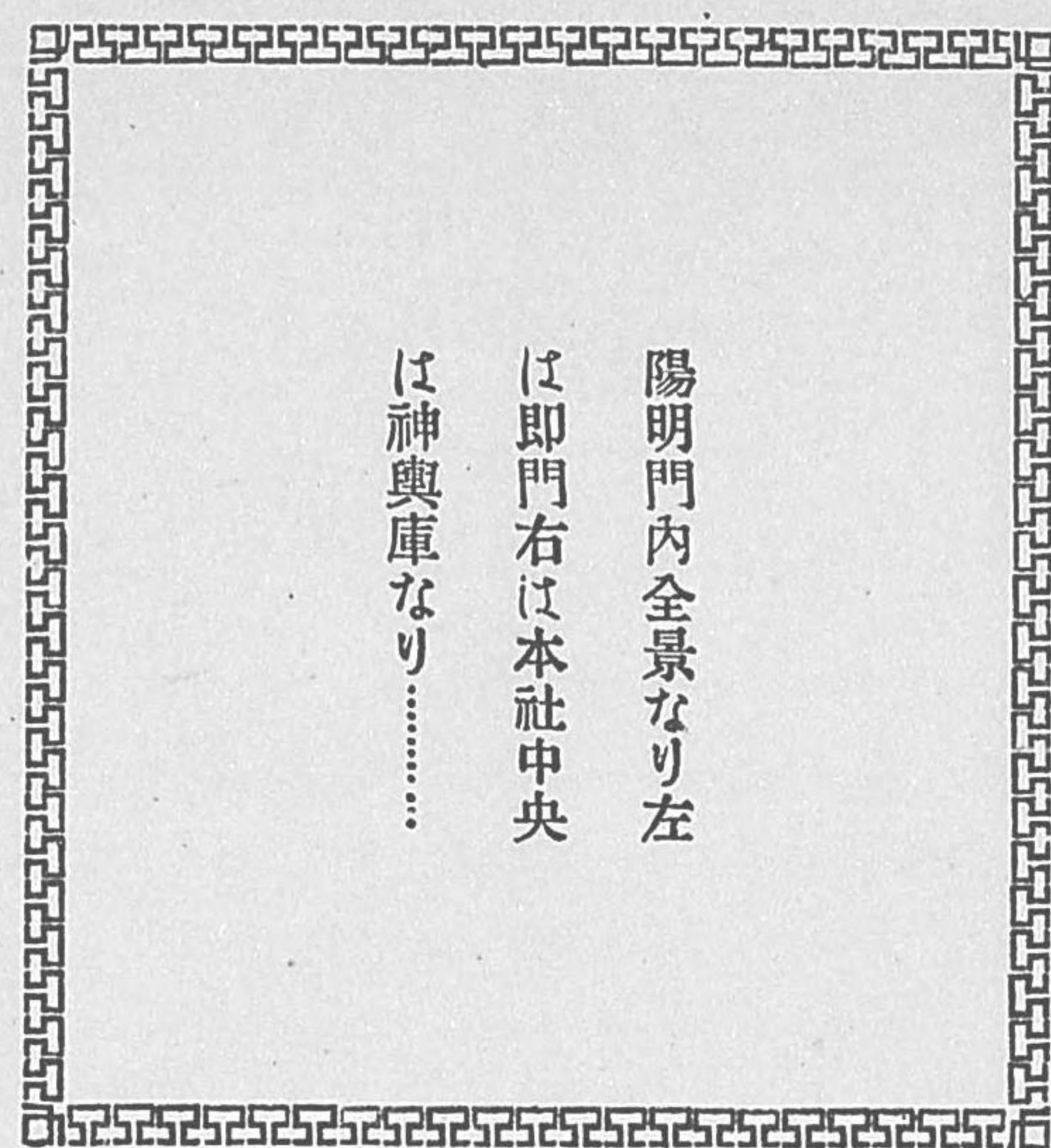
王門

木目虎

陽明門の中柱に刻せる虎年を経て客
の之を撫するに従ひ漸く其木地を現
はし今や其木理恰かも虎の班紋の如
し



陽明門と全景



陽明門内全景なり左
は即門右は本社中央
は神輿庫なり………



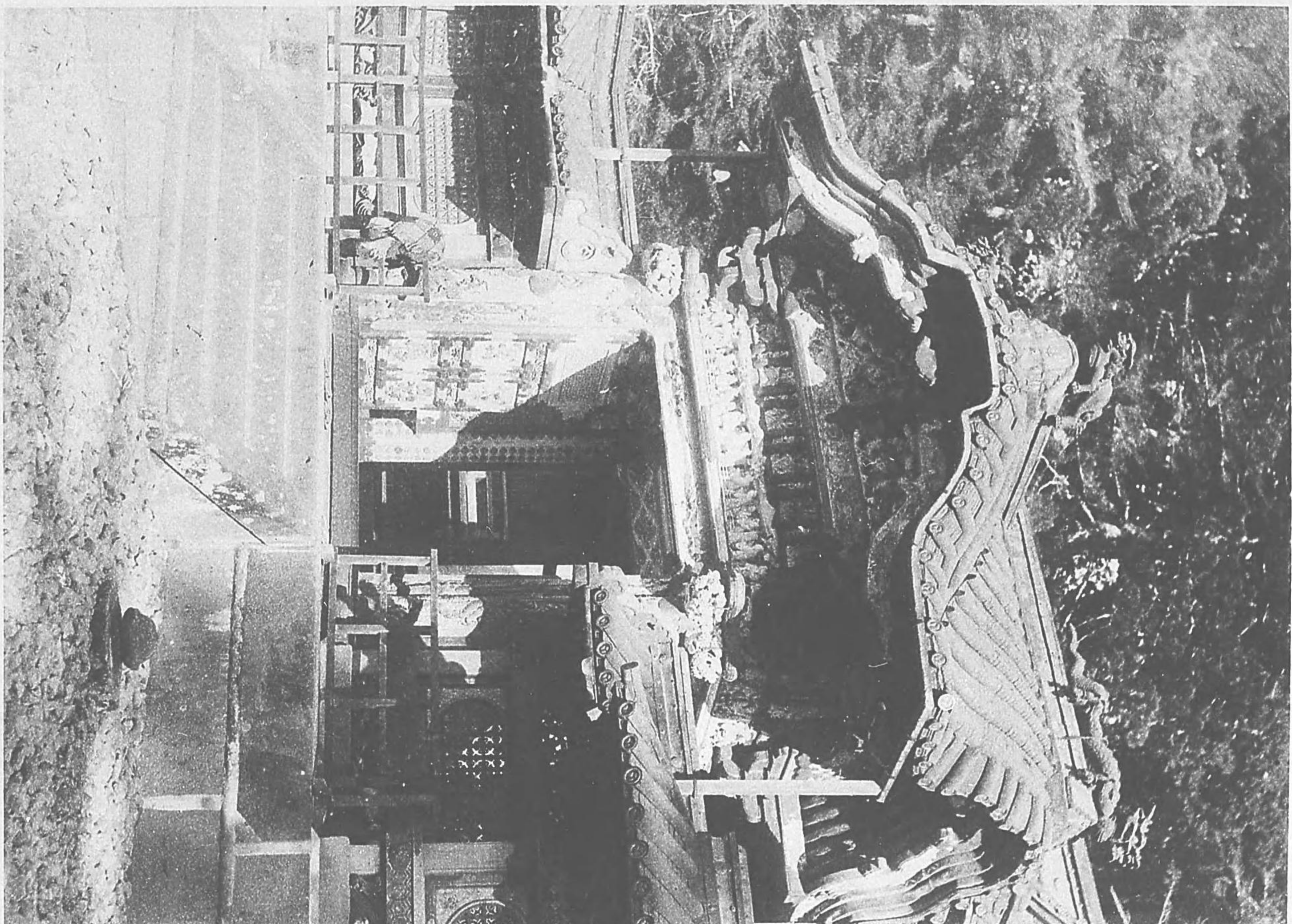
本
社

これ陽明門を入りて先づ打
見たる本社全景なり正面
にあるは唐門なり唐木を以
て造る故に名あり……



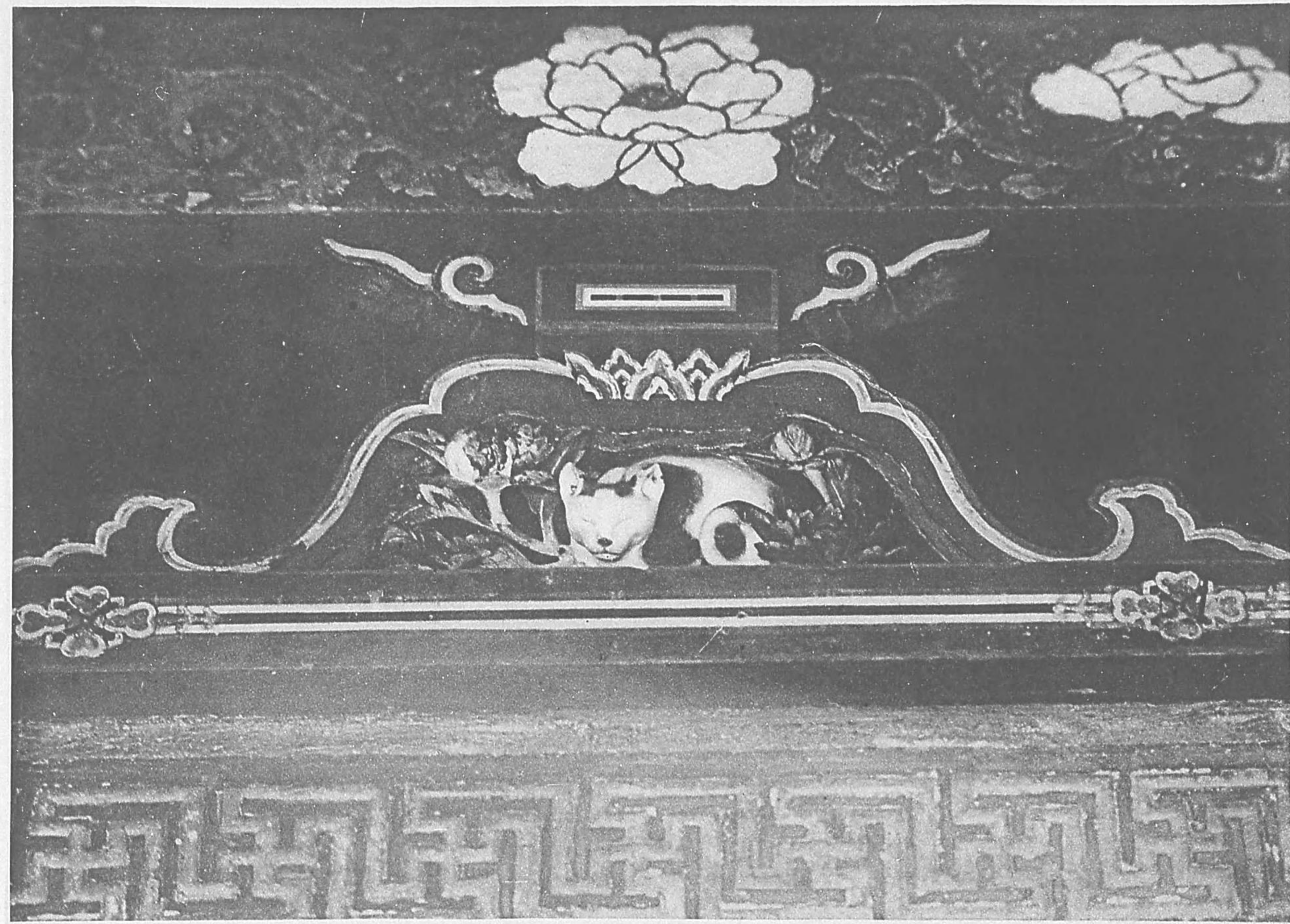
唐門

屋上に紫銅の恙虫を置き外
柱には雙龍を刻し間楣破風
等には孔子十哲及七福人七
賢人を刻す扉亦唐木一枚板
にして菊牡丹梅を彫刻せり
門を入れば拜殿あり……



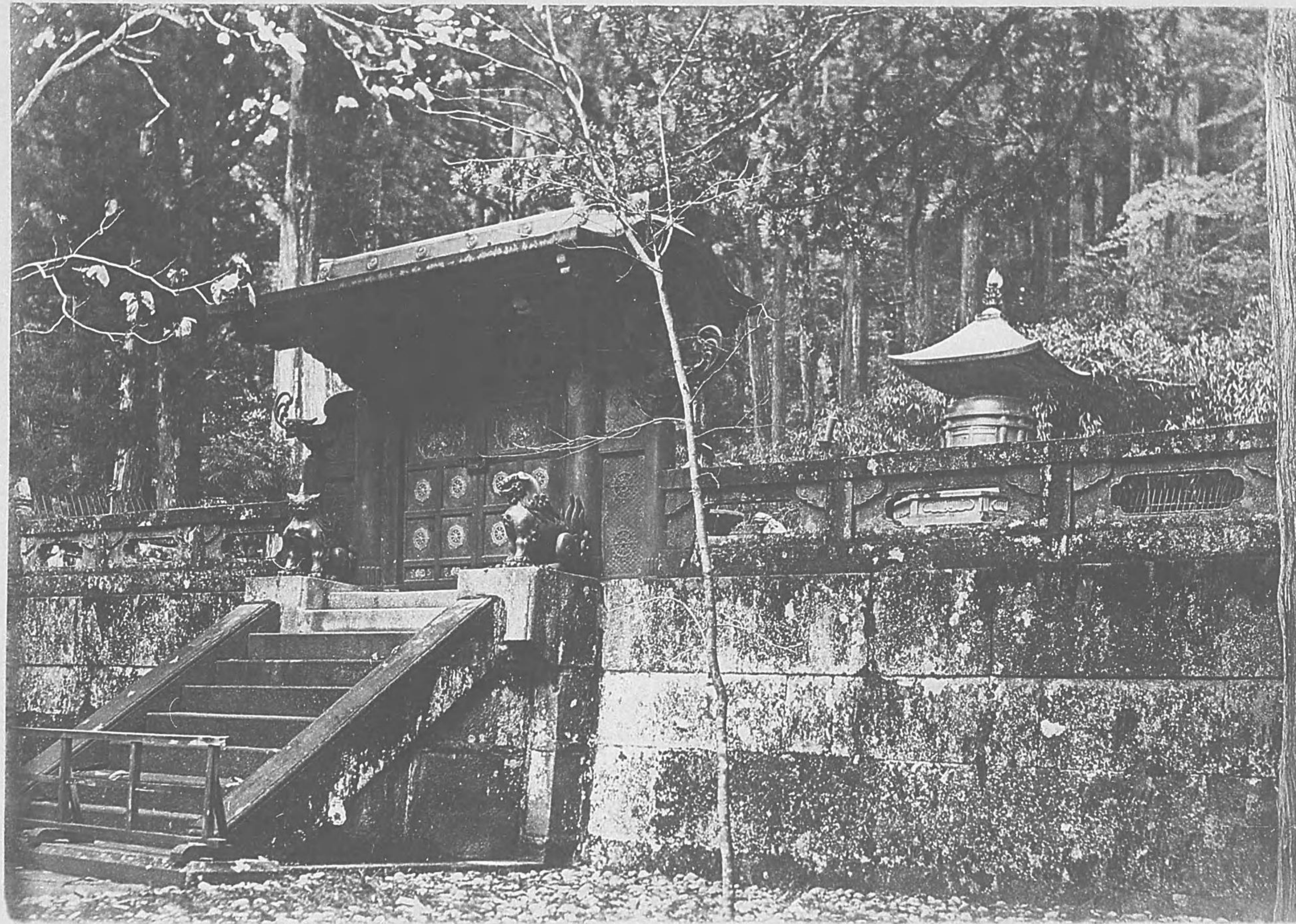
眠
猫

本社を出て坂下門
に到る中途の一門
の承塵の下にあり
左甚五郎の作と傳
ふ……………



寶塔

坂下門を経て二百四段の石階を
登ればこれ奥の院老杉深く翳し
て晝猶暗し拜殿の裏に青銅にて
高さ一丈餘なる擬寶球形の寶塔
一基ありこれなん三百年前の老
雄瞑目の所……

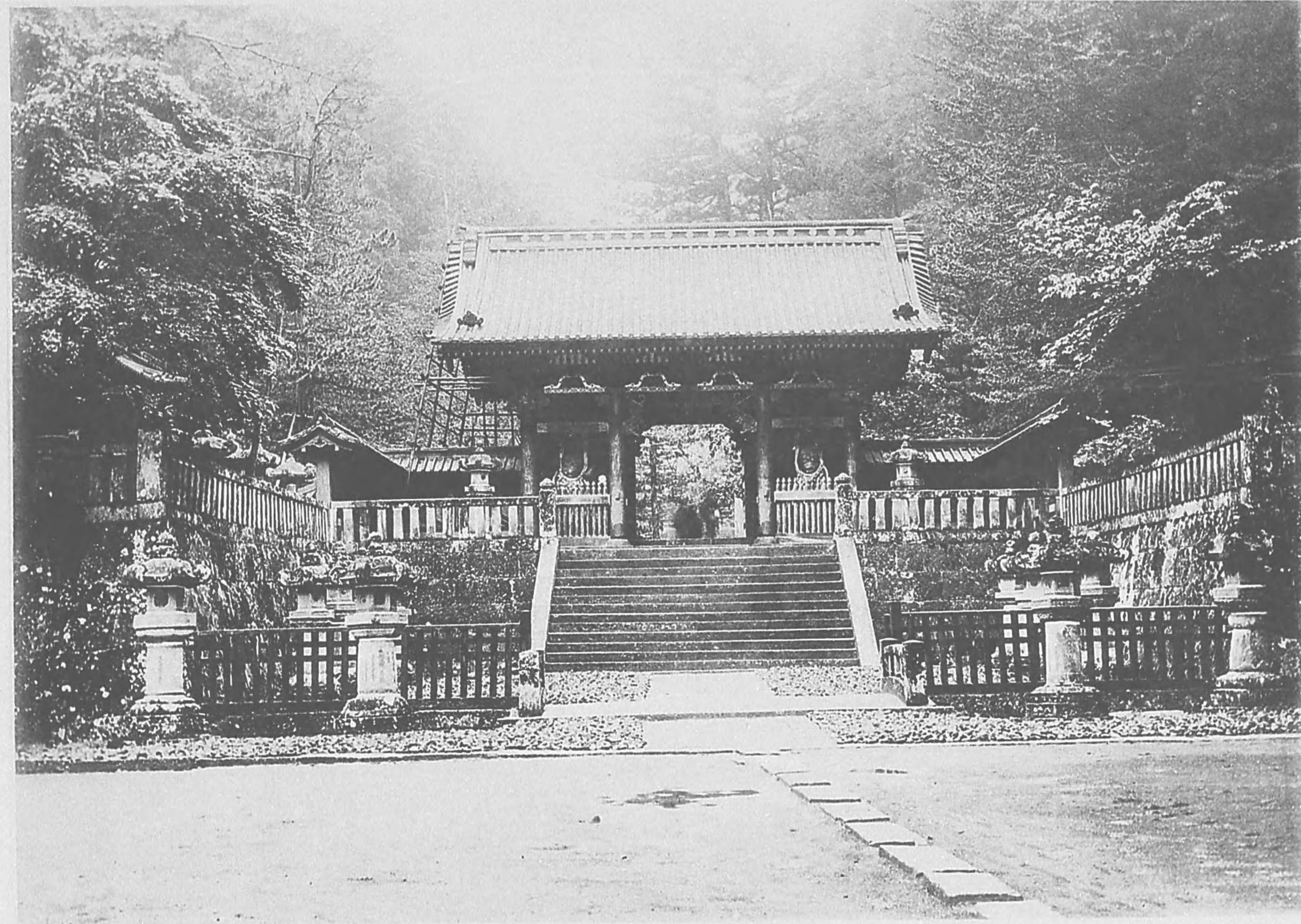


寶
峯



三代廟二王門

これより大猷院廟徳川三代將
軍家光の靈を祀る所なりこは
この二王門にして左に那羅延
金剛右に密迹金剛を置く……

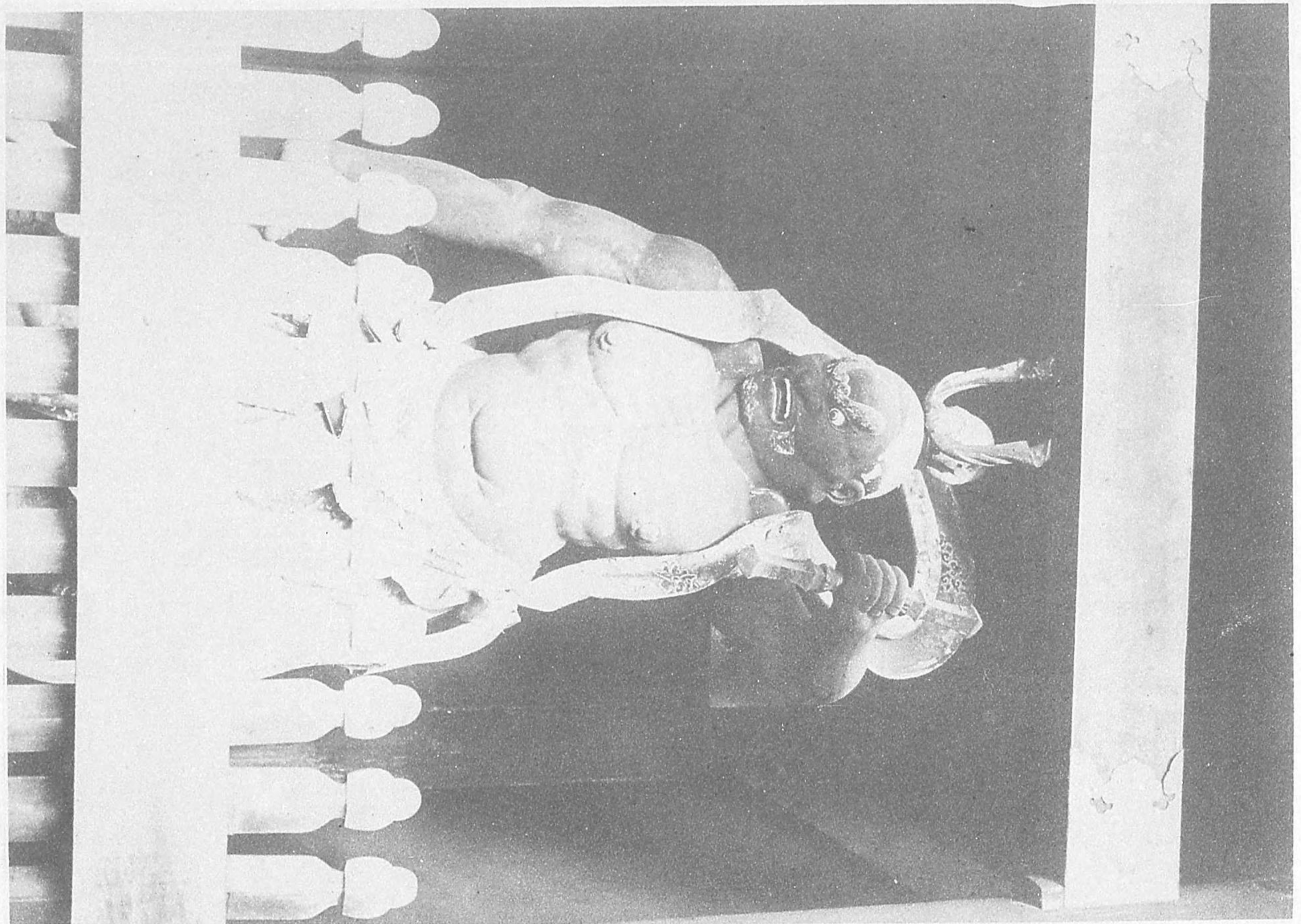


三升禰二王門

仁王像

こは仁王門の那羅延金剛なり





二天門

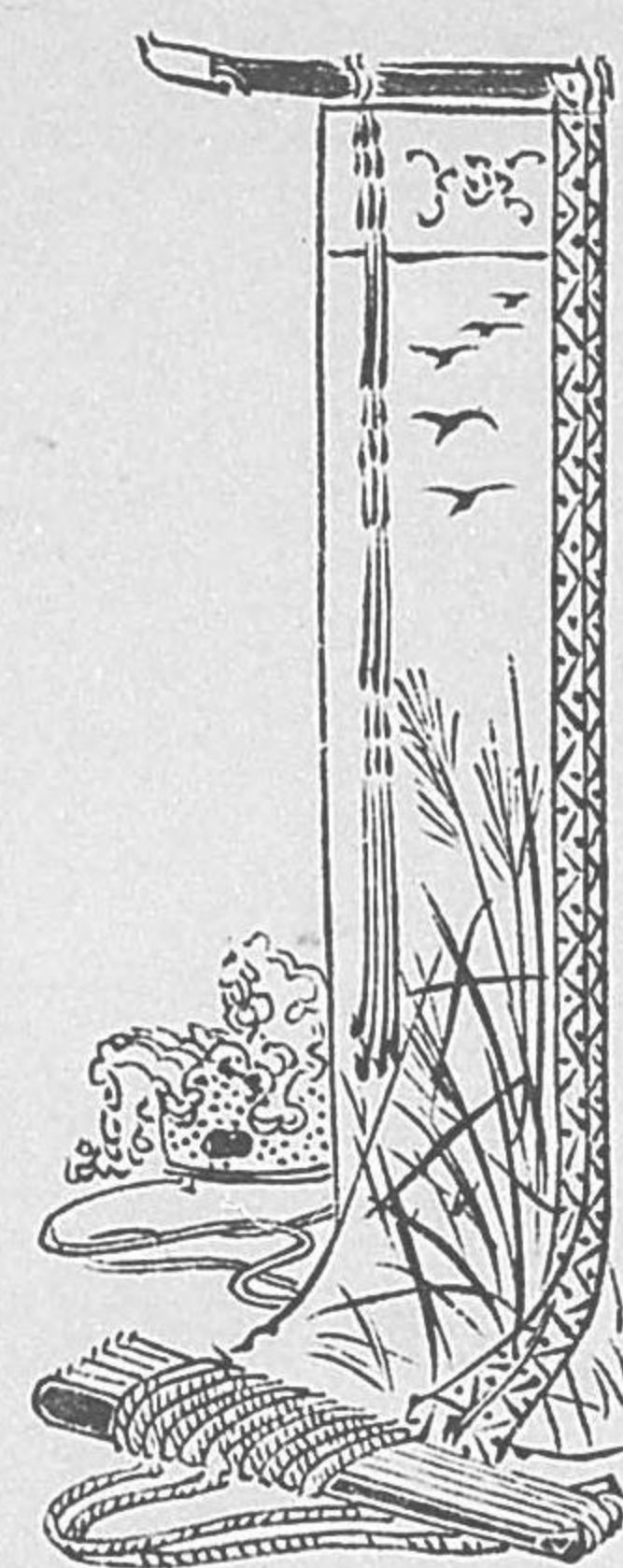
二王門を入り左りにあり表
面左右に廣目天持國天を安
置し裏面に風雷二神を置く
大猷院なる匾額は 後光明
天皇の宸筆なり……

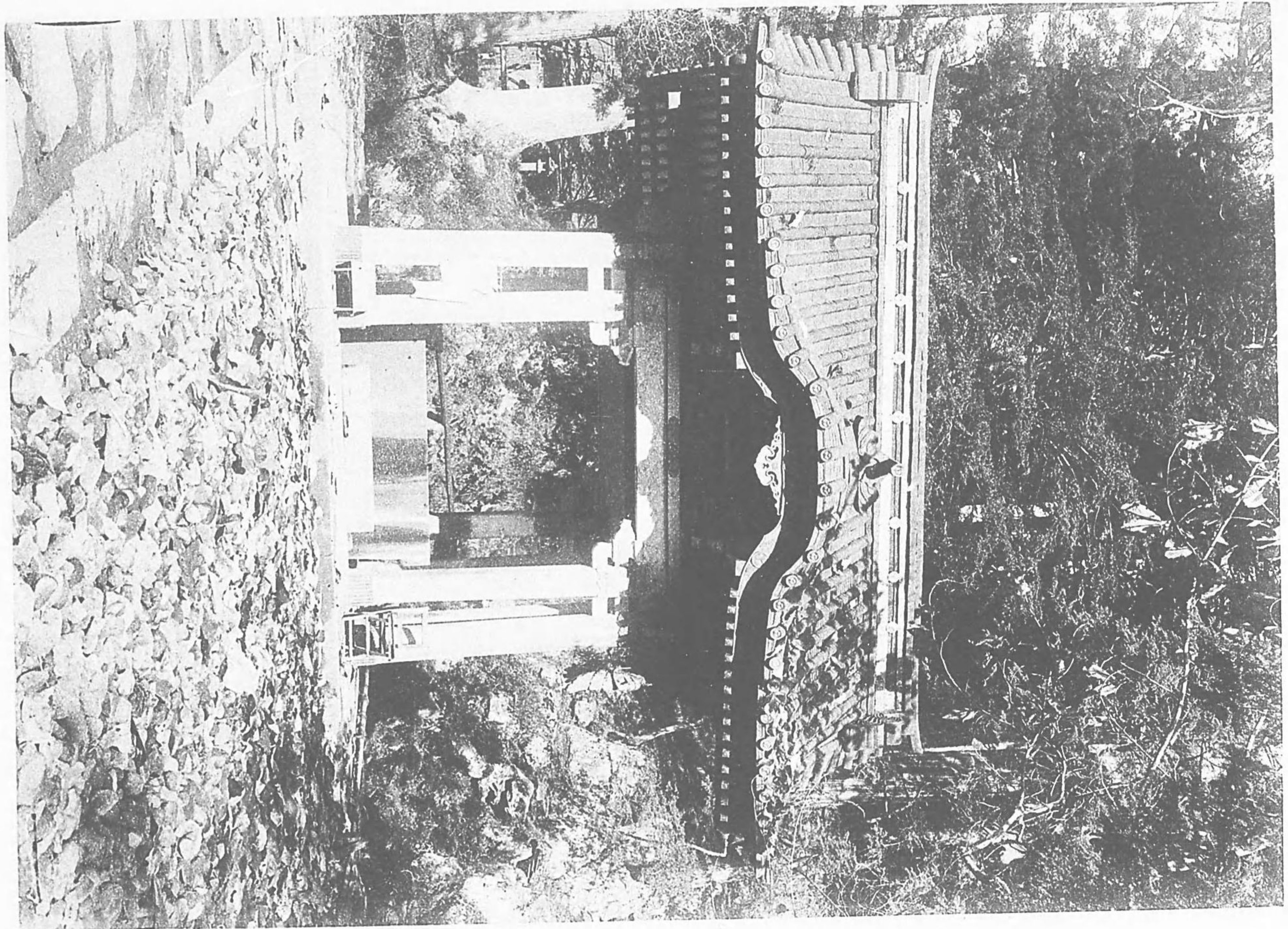


二天門

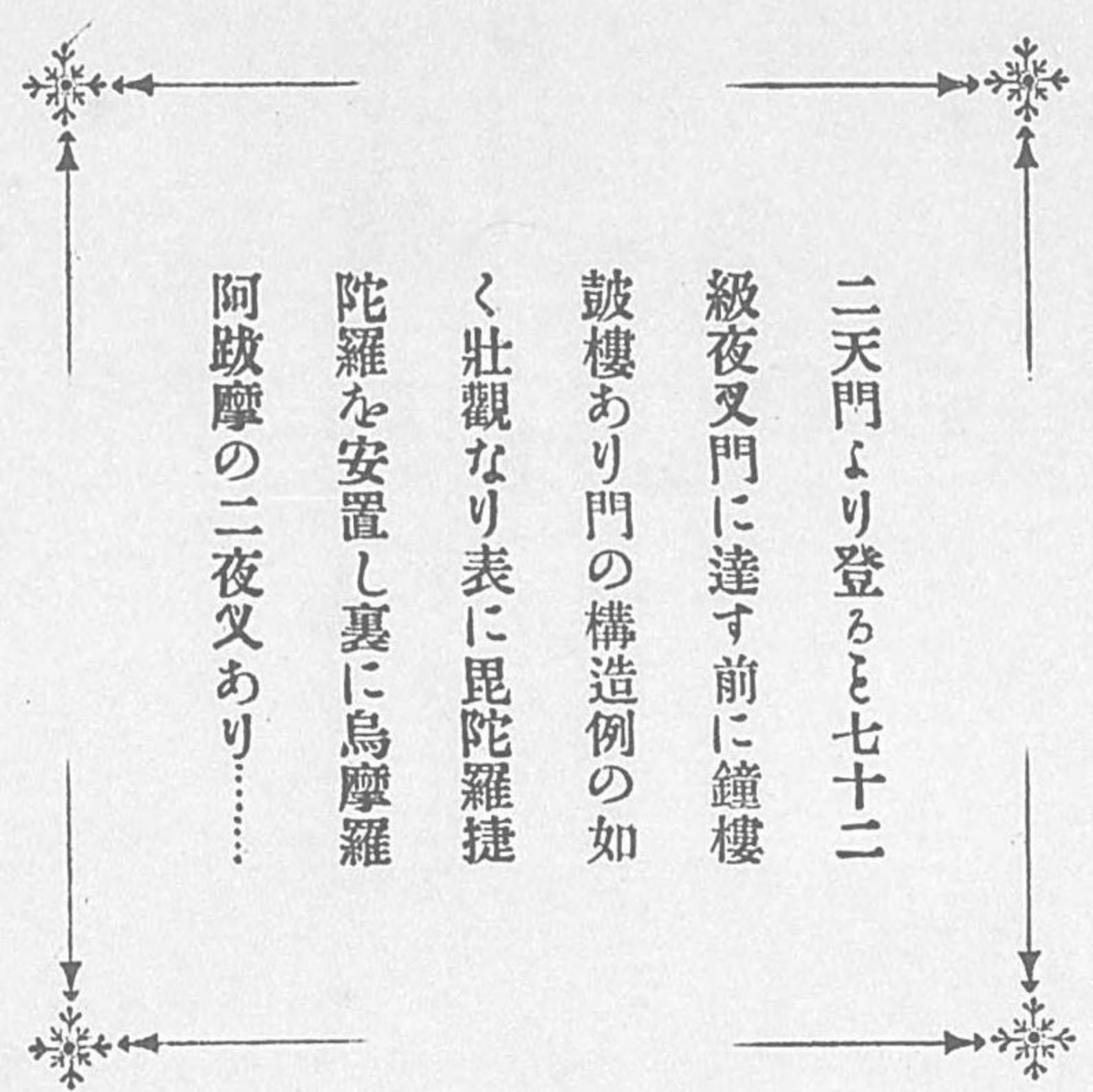
水盤堂

東照廟の美には及ばず





夜叉門



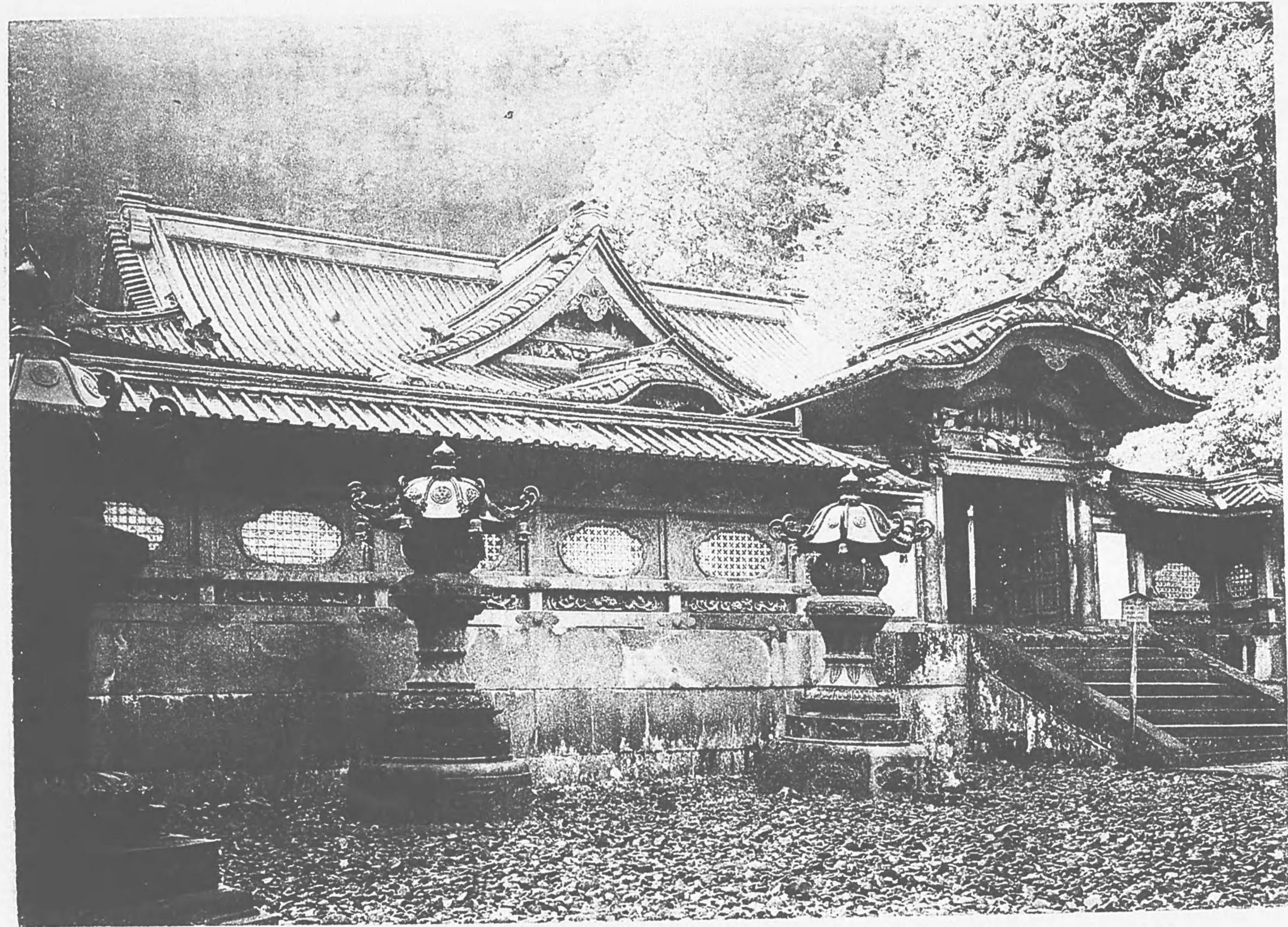


齊
叉
門

三代廟本社

正面にあるは唐門なり殿内其他鏤刻の結束
照廟に譲らす

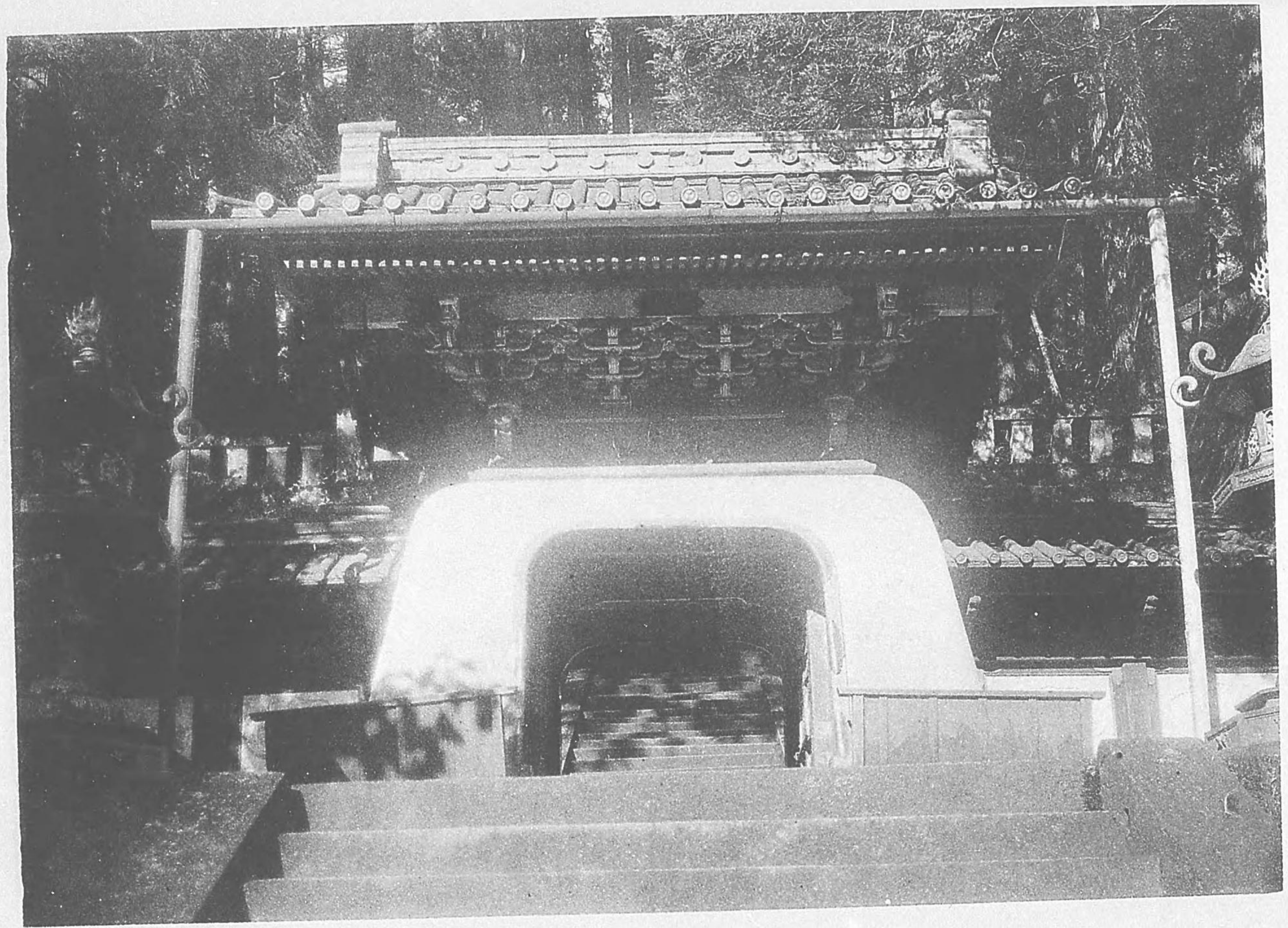




光華門

本社を出で左折して家光寶塔に詣る途中に
あり俗に龍宮造りと稱す.....





含満淵

大谷川の彼岸を傍ふて行くと五町ばかり琳宮寂寞梵唄靜かに聞ゆ慈雲寺といふこれを過くると西北數十歩にして所謂含満淵なるものあり奇岩峭立溪水を束れて深潭なる水の色縹緑大渦小渦盤桓して流る石佛數十軀あり跌坐して潭に對す潭光青を曳き碧を舒べて日夜寂寞を歌ひ石佛獨り黙す雨淋霜打して眉目銷磨せんとし身に葛羅の衣をまこひ面に苔髭の長きと一寸なるあり奇古喜ぶべし北岸の大岩斧劈皴を成すのころ依稀として梵字を見る傳へ曰ふ弘法大師の此岸より筆を抛うちて書きしものさ更に溪邊に靈庇閣あり坐して深潭を見るべし今は荒廢す……麗水



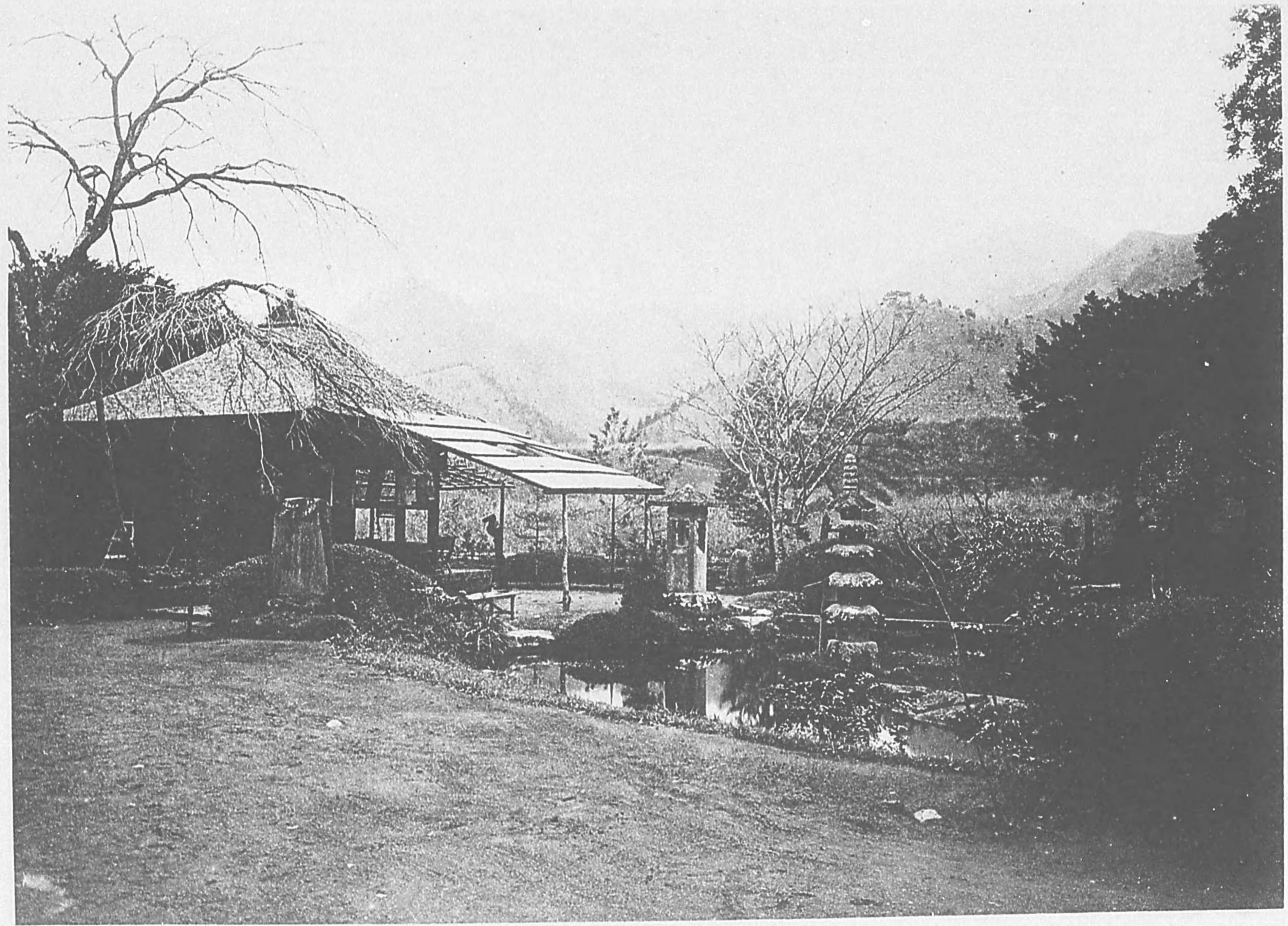
含
蕭
巖

大日堂

こは日光十二景の一にして小池堂を周らし
水清く澄み湧けり中央に枝垂櫻の大なるも
の二本あり花時には其艶麗いかならむ此所
管に庭中の構致妙あるのみならず前には大
谷の急流軽々の聲を放て流れ遙かに峰巒翠
を送り真に絶景と稱するに足る……………



あら尊
青葉若葉の日の光
はせを

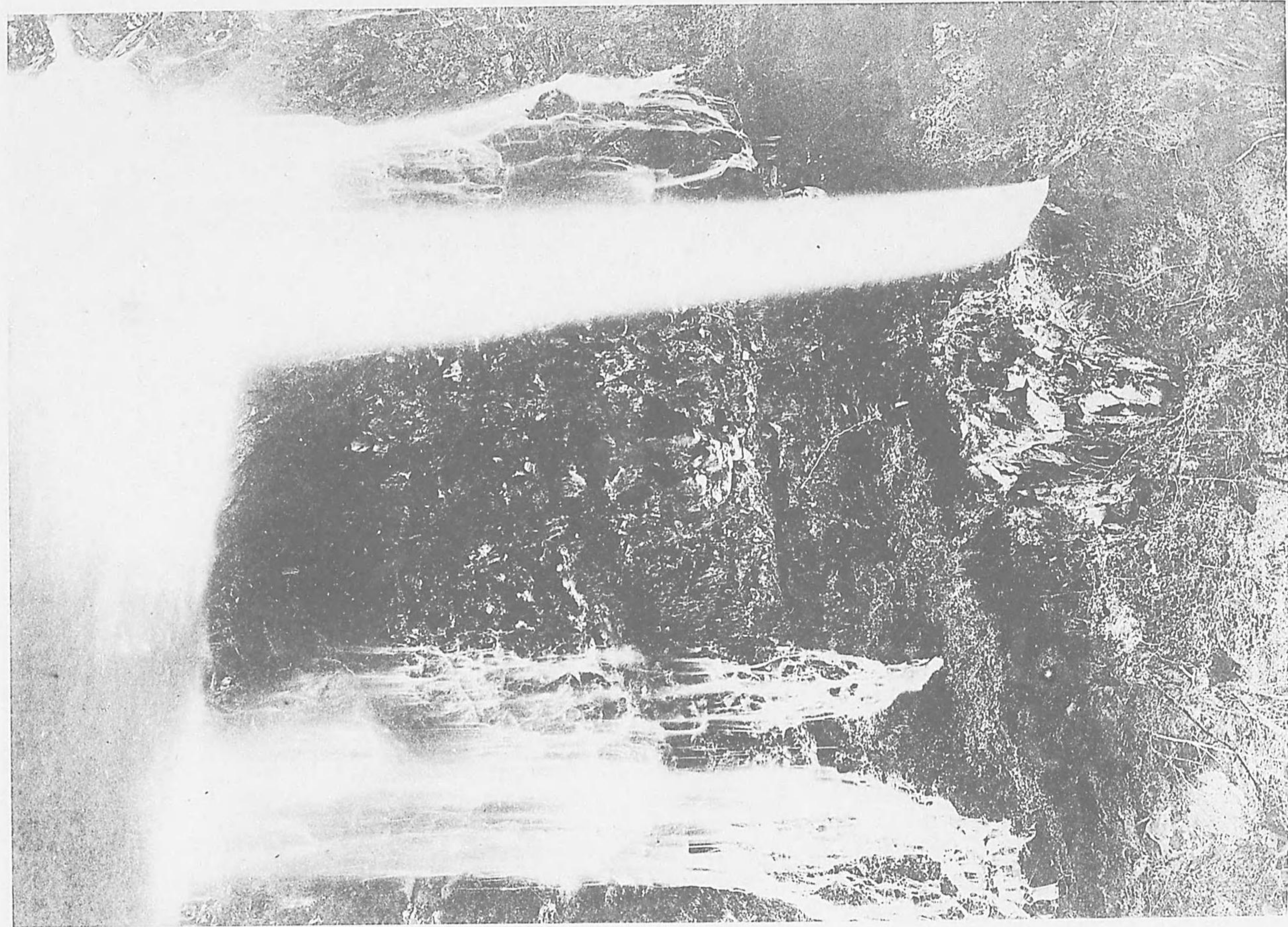


大日堂

二月廿二日景心一三丁小幡堂を照る

裏見瀑

神橋より一里餘荒澤といふ所に在り高さ十丈幅二間怪岩上より直下崖道を超えて飛ぶ故に人若し此崖道を傳ふて進めは容易に瀑下に到り其背を望むこれこの瀑の名の起る所以………



寒泉

深澤屏布岩

その岩—高さ大凡千五百尺に
も越えつへきしかも材木を建
て重ねたる如く屹として突立
ちたる岩山の一面は全くその
薄桃色の八汐の花を以て蔽は
れたるが空の深碧と若葉の新
緑とに反映したるさまのうっ
くしさあいわれこれを何と
言はむ……………田山花袋

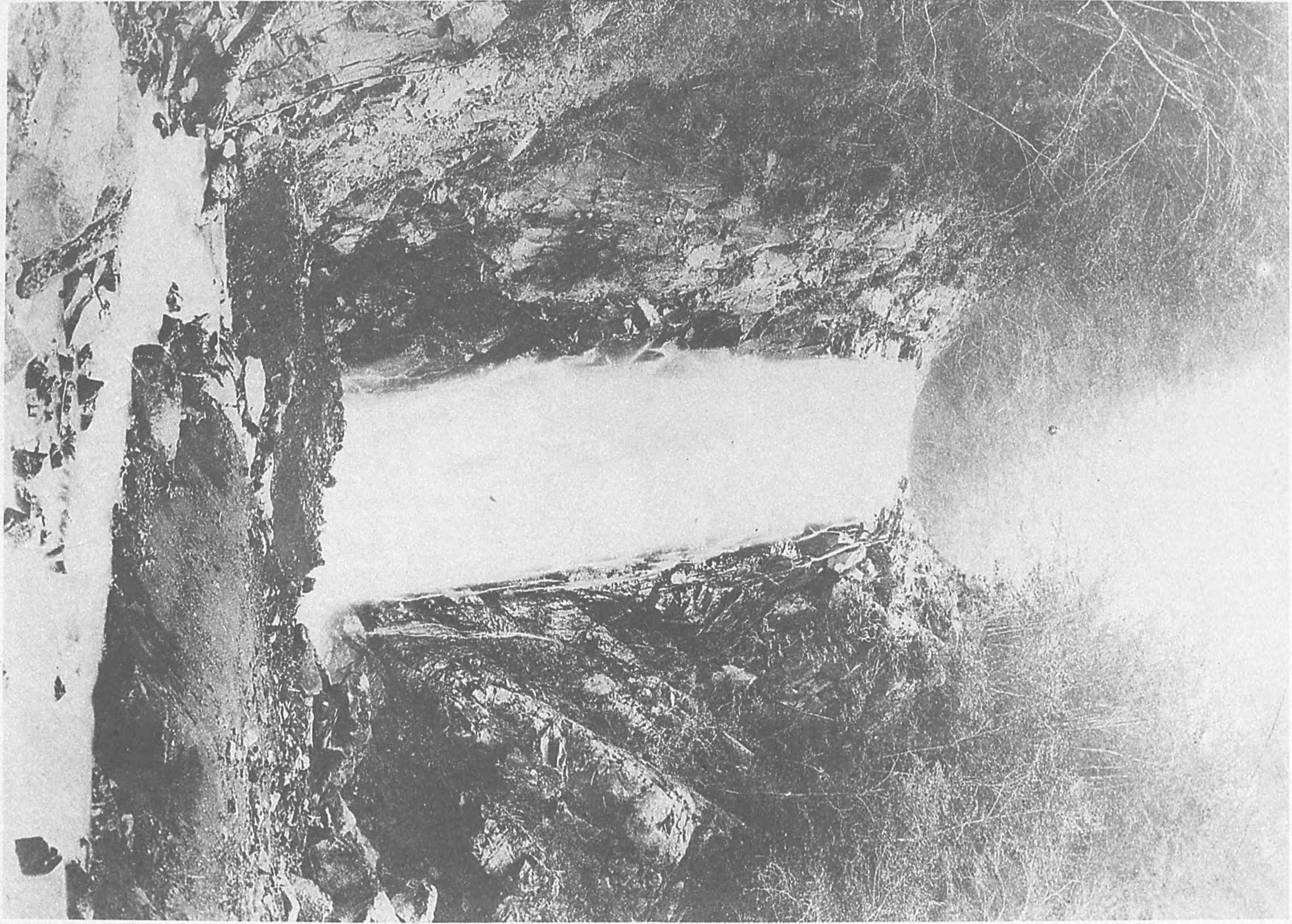


新報報林岩



方等瀑

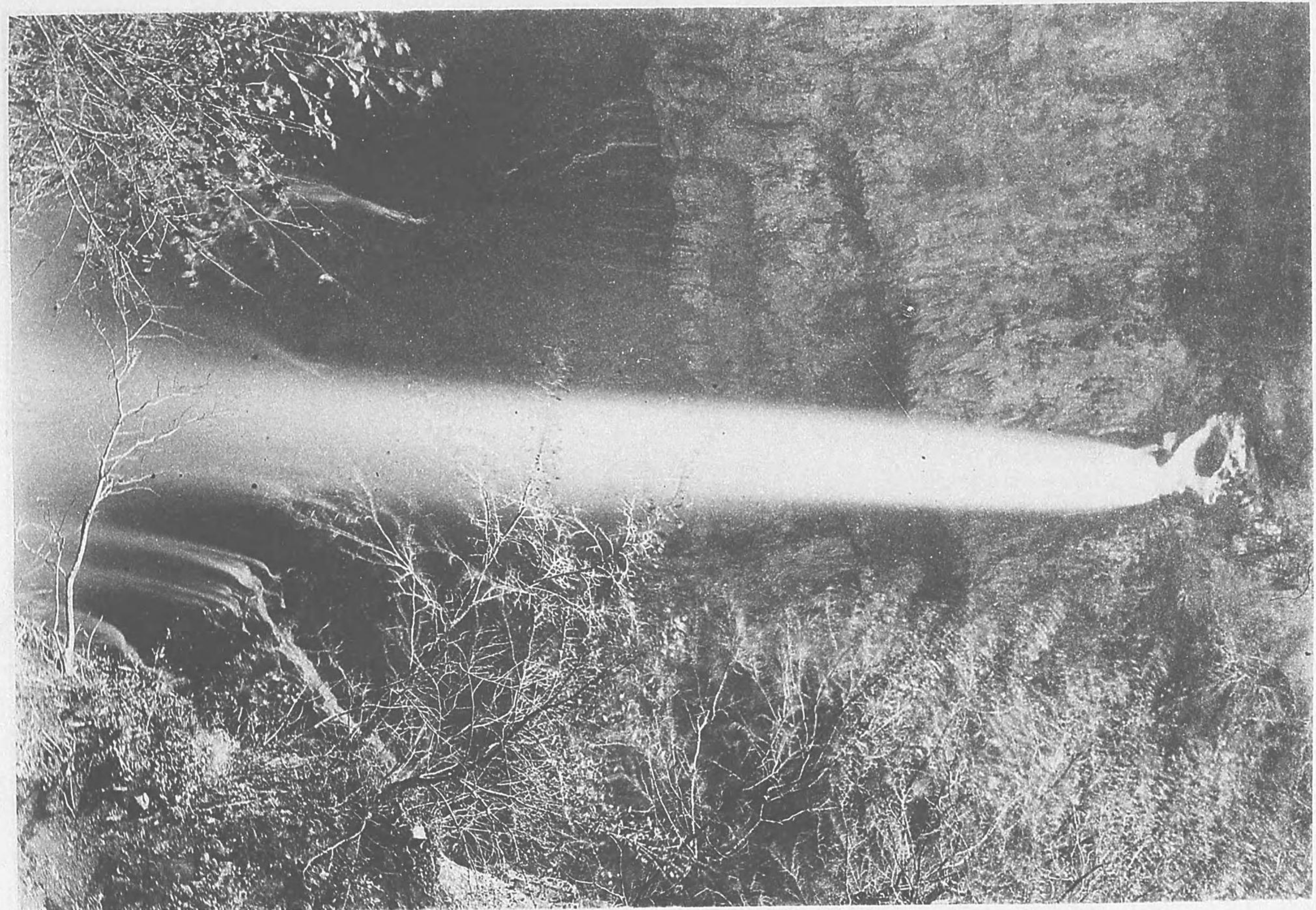
深澤を過ぎて劔ヶ峰にかゝる
登るこゝ少時にして一茶亭あ
り此所より遙かに二瀑のこ
れるを望む右に遠くして少
きは般若瀑左近くして大なる
は方等瀑なり……………



華嚴瀑

仰き見れば一道の大瀑天を劈いて滾々
崩落すると幾百丈無数の絮塊層々を吐
いて断ゆるか如くまた断えさるか如く
始めはたゆたふか如きもその勢愈烈し
くなりもてゆきて遂に轟然萬雷の音し
て潭底を撃ちなほたてまはしたる絶壁
の隙より飛泉の濺々として迸り出つる
もの幾十條なるを知らず潭中沸々とし
て鼎のわくか如く餘沫雪を吹いてまた
寸碧を見ず(中略)見る／＼一帶の白雲
瀑の上頭を封し來りて巖に迷ひ樹を抱
き歩趨躍動してさながら活きたるもの
か如きに鋸齒の重たるか如き絶壁の間
に飛ひかふ幾百の岩燕一層の趣を添へ
ていさをかしく水石相闘ふの音天地を
ごよもしていさましくもまた物凄し……

大町桂月



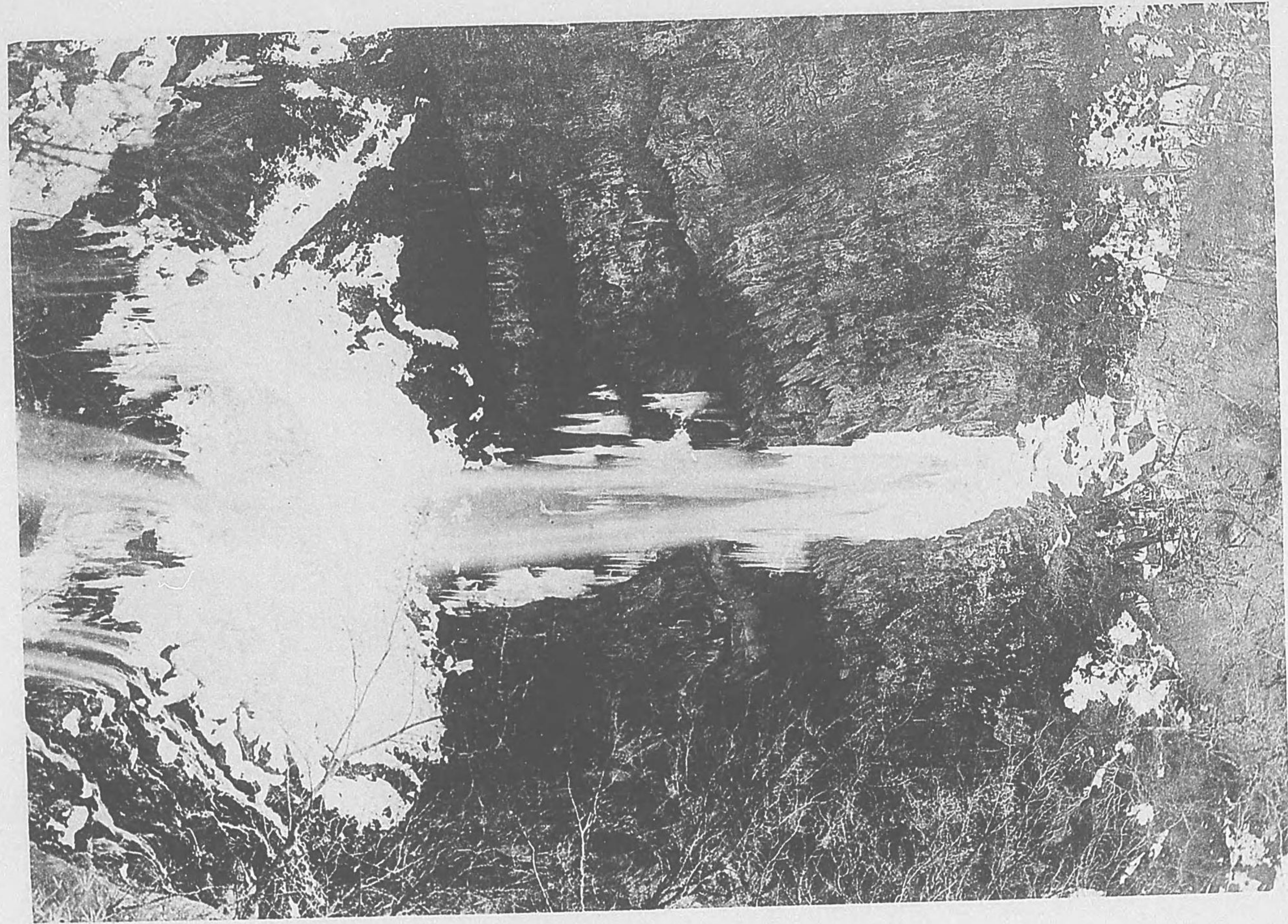
華瀨暴



仰々見外一並の大羅天小雲のうき

華嚴の氷結

七十五丈の大瀑布今や恰かも明
浩水晶の如く十二瀑に懸垂せる
白刃の如し萬籟聲を潜め瀑底唯
僅かに寒風の飄たるを聞くのみ
人夏の華嚴の壯を説くもの多し
と雖も亦冬の華嚴の此の如く雄
なるを知るもの殆んどあらざる
なり……



中禪寺湖

こは歌の濱なり相對するは所謂
中宮祠背に男體の峻岳を負ふも
のなり漣漪寄する所旗亭二三あ
り欄に倚りて洗洋たる湖光を弄
ぶべし.....



中野寺

戰場ヶ原の雪

荒涼たる戰場ヶ原

枯れ

たる

木残れる雪

吹き號ふ男體風

山氣凌々肌に轍す





龍頭瀑

中禪寺より湯本に

ゆく中程に一帶の

溪流あり橋あり地

獄橋といひ傍にあ

る茶店を地獄茶屋

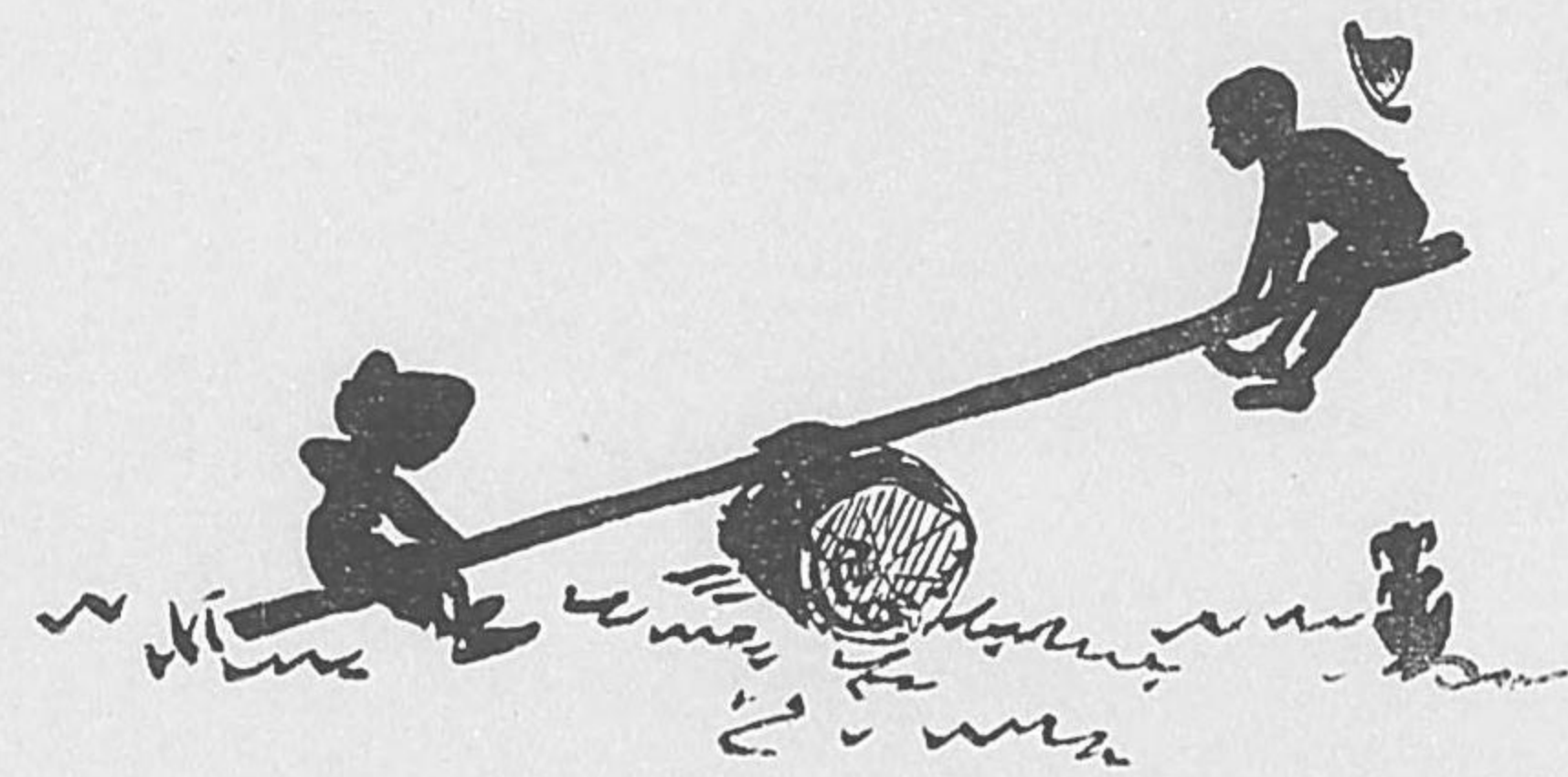
といふ瀑はこの茶屋より少

しく左せる溪澗中にあり直

下幾丈底の壯なしと雖も亦

右に左に轉々幾百曲の奇を

稱すべし……………*



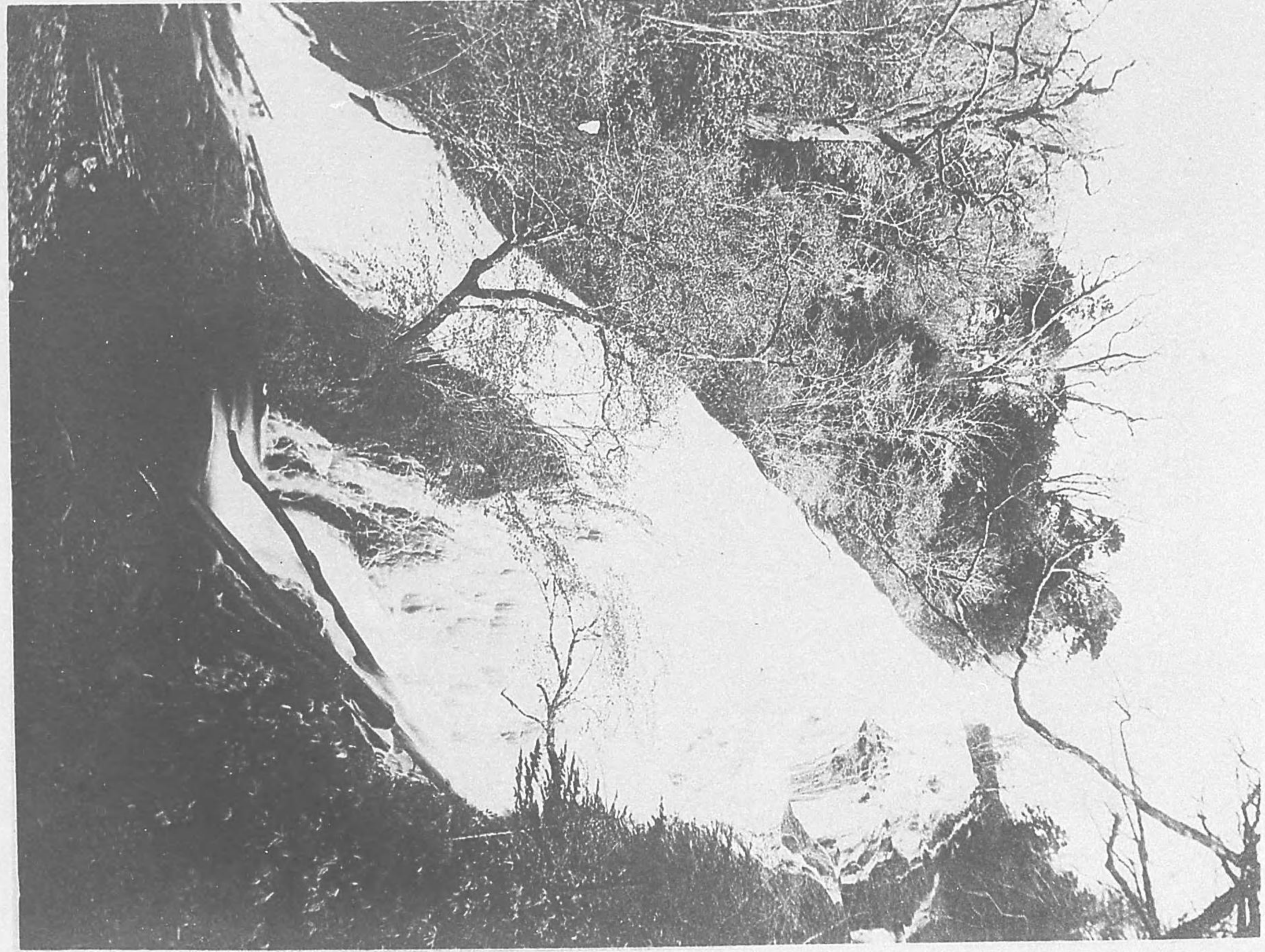


諸巖影



湯
瀑

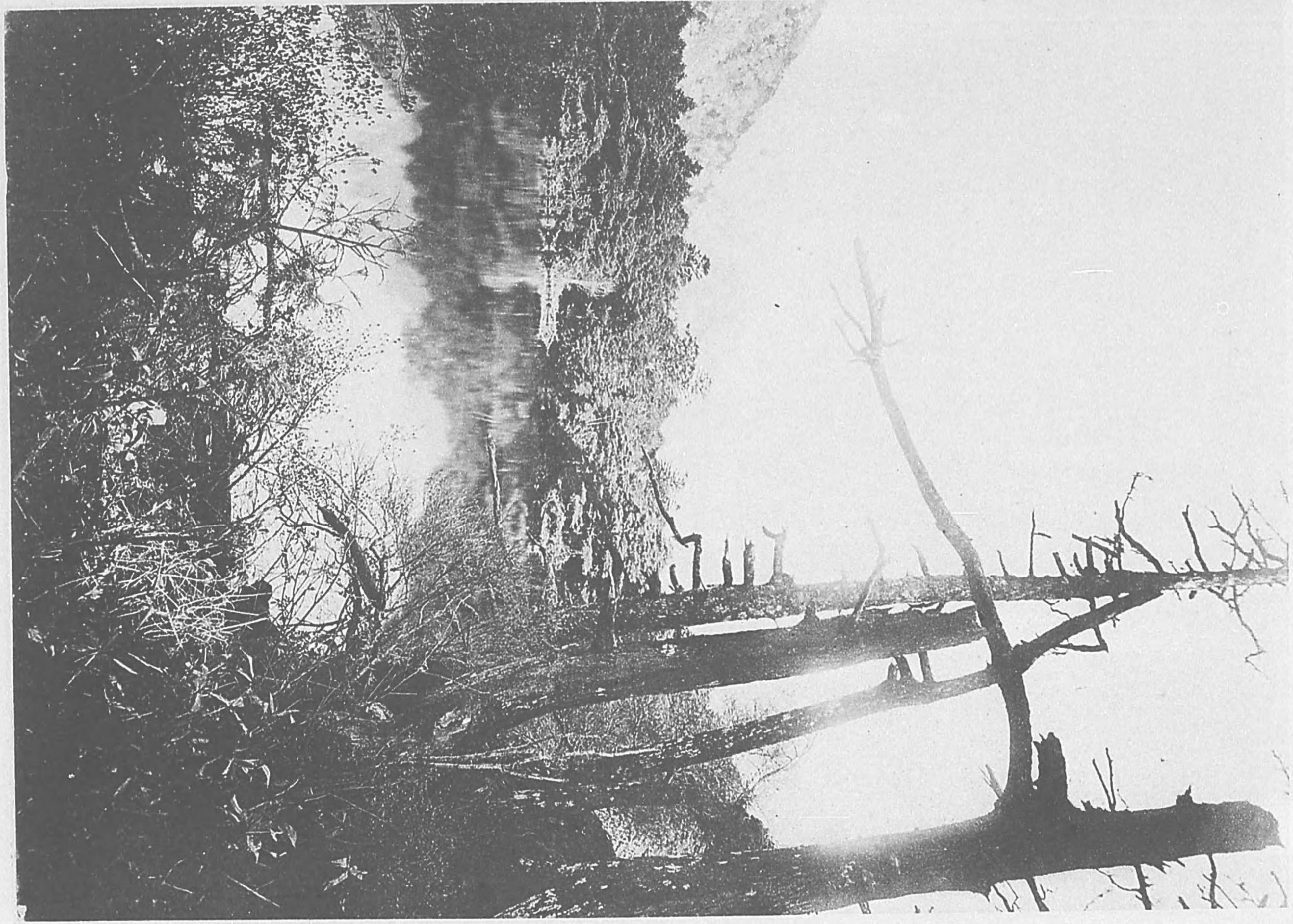
戰場の原を過ぎて湯の湖の
決する所にあり斜めに巖上
を急下する所大に奇なり...



影
景

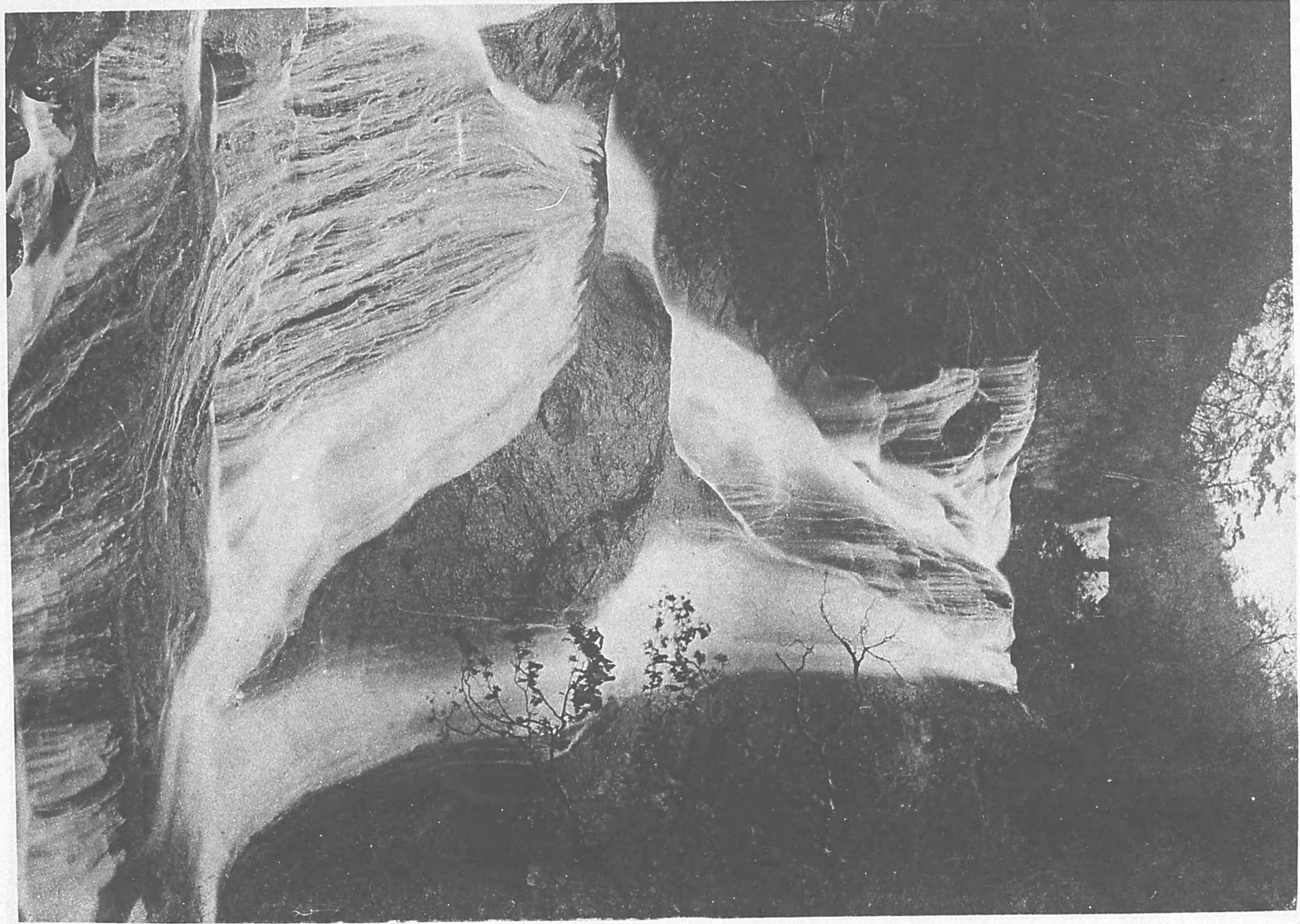
湯本温泉岳

蓬萊巖より水線攀の如き湯
湖を隔て、遙かに温泉岳を
望む所此邊の光景大に幽邃
怡かも北米ヨセミテ溪の觀
あり……………



霧降瀑

大谷川の假橋を渡り右岸に沿ふて行き
一路逶迤登り盡せば坪所あり鬼怒川の
清瀬を望み奥州の山と對す老嫗あり茶
を賣る賣茶亭の後より懸崖を下り蛇行
すると數百武にして鞆として大瀑聲
を聞き山開き路盡きて即ち霧降瀑露る
高さ三十丈水の初めて落つる時甚た廣
からず岩の水路に當るもの凡そ五層水
一層毎に其の幅を加へ其の勢を増し潭
邊に到る頃ほひ其の幅正に十餘丈一激
して水晶簾を垂れ二激して狼雨となり
三激四激して大沫は電狂し小沫は霧舞
す壯觀なり………麗水



雲南縣



明治三十二年二月二十五日印刷
明治三十二年二月十二日發行
(旅の家土産第拾壹號)
(非賣品)

發行兼印刷者
中尾新太郎

東京市赤坂區田町七丁目四番地
光村方寄留

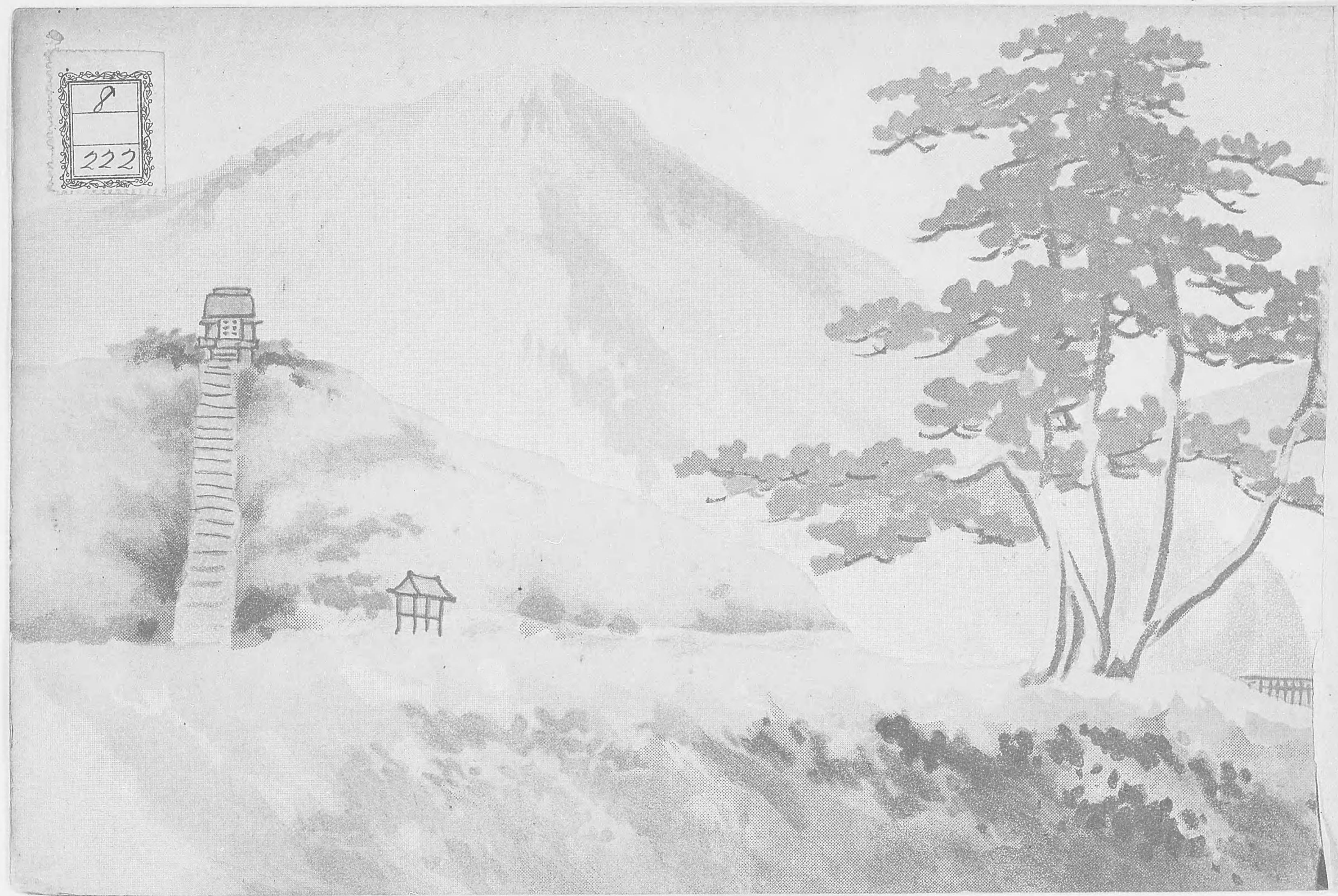
發行所
光村寫真部

東京市赤坂區田町七丁目四番地

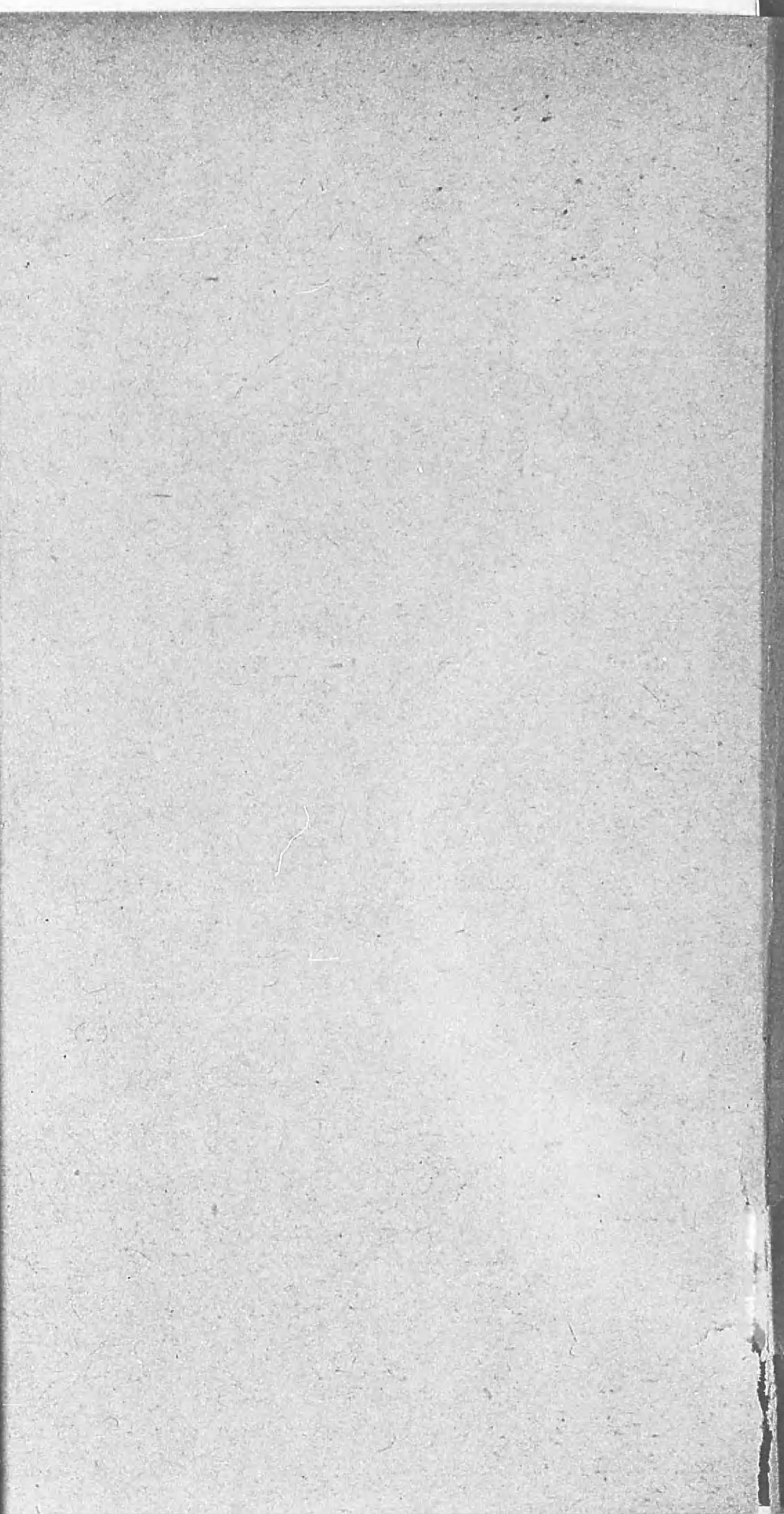
印刷所
光村寫真製版部

東京市赤坂區田町七丁目四番地

8
222



冊三十一卷二頁
冊三十二卷二頁二十五日
一書
品





8
222

終